

2010年度 修士論文

地方都市を事例とした寺院建築の用途転換に関する研究

A study of adapt use of Buddhist temple to an urban facility in suburban city

阿礼 めぐみ
AREI, Megumi

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

目次

第1章 序

- 1.1 研究の目的と背景
- 1.2 研究の対象
 - 1.2.1 菩提寺について
 - 1.2.2 対象地域について
- 1.3 既往の研究
 - 1.3.1 保存改修の基本概念
 - 1.3.2 保存改修の言葉の定義
 - 1.3.3 用途転用の歴史
 - 1.3.4 既往研究
- 1.4 論文の構成

第2章 現代における仏教寺院と都市

- 2.1 宗教社会学からみた仏教
 - 2.1.1 統計調査にみる宗教心の変化
 - a. 日本人と宗教一概論
 - b. 現代人の宗教意識
 - c. 時代による宗教意識の変化
 - d. 家の宗教という観念
 - 2.1.2 現代の葬式と仏教
- 2.2 社会史から見た都市と寺院
 - 2.2.1 都市の発展と社寺
 - 2.2.2 現代都市における寺院の試み
- 2.3 景観的観点からみた寺院
 - 2.3.1 原風景としてのお寺
 - 2.3.2 絵画の中の寺院
 - 2.3.3 現代の名所
- 2.4 まとめ

第3章 長岡地域におけるケーススタディー

- 3.1 長岡地域の寺院
 - 3.1.1 長岡地域の寺院の概要
 - 3.1.2 寺院の規模・伽藍の構成・立地
- 3.2 長岡地域の寺院の現状
 - 3.2.1 将来人口推計から予測する檀家数の減少
 - 3.2.2 寺院関係者へのヒアリング
- 3.3 景観構成要素としての寺院
 - a. 本堂のヴォリューム、大屋根
 - b. 奥行き
 - c. 領域性や境界性をもつ植栽
- 3.4 都市機能としての寺院
 - 3.4.1 寺院の分布と、遍在性
 - 3.4.2 面積比にみる寺院
- 3.5 まとめ

第4章 寺院の用途転換に関する提案

- 4.1 寺院用途転換
 - a. 寺院とその風景を継承することの意味
 - b. 日替わり公共サービスとの連携
 - c. 地域全体計画
- 4.2 寺院の用途転換—提案

第5章 まとめ

- 5.1 寺院の用途転用の可能性と課題

第1章 序

1.1 研究の背景と目的

現代は環境の世紀と言われており、「持続可能な環境」を造ることは建築や都市計画分野における重要な課題である。その手段の一つとして、既存建物の再活用が注目されるようになって久しい。この手法は、環境負荷の軽減だけではなく、地域文化や歴史性への貢献にも大きな役割を果たしている。既に欧米では都市の中で重要な建物を時代のニーズに合わせて改築・改修し使い続けていくと共に、古くからの街並や風景といった都市環境を継承していく文化や思想が発達している。

日本固有の風景を考えたとき、仏教寺院は一つの重要な要素であると言える。中世から現代まで、木造建築を主体とする日本の都市空間は様々に変化してきたが、その中でお寺は歴史性や普遍性を保持しつづけてきた、数少ない要素である。寺院建築は普請が良いことや、歴史的価値、確立された様式、などの理由から、改修改築を加えながらも100年以上使われているものが多い。また、近世近代から立地自体がほとんど変わっていないことも多く、都市空間の歴史性や連続性に貢献してきた。このような点から、寺院とその境内を都市の中で脈々と引き継いでゆくことは、持続可能な都市環境の形成にとって重要であると考えられる。

寺院建築は大都市から地方の村落まで津々浦々に存在し、現在その数はおよそ7万7千である。これは単純に比較すると、コンビニエンスストアの数のおよそ2倍である。しかし、ほとんどの寺院は文化的保存の対象とはなっておらず、政教分離の方針から公的助成を受ける事もできない。そのため寺院を維持管理していくのには多大な経費と労力がかかるのが現状である。そして、何らかの原因で存続が不可能となった寺院は、“廃寺”となり、建物自身も取り壊されてしまう。

また、これだけ多くの寺院が存在するにも関わらず、現代人の宗教意識の希薄化と慣習の衰退は進んでいく一方である。かつての寺社は、地域コミュニティの場であり、賑々しい行事の場であり、子供の遊び場であり、都市のポケットパークであった。しかし近年では、神社は慶事に仏教寺院は凶事にしか縁が無くなりつつある。加えて現在予測されている人口減少及び都市の縮小化は、寺院の存続を危惧すべき大きな要因である。

仏教寺院は、古くから、どこにでもあるコミュニティ施設として我々の原風景の一部に刻みこまれてきた。そこで、従来の伝統的建造物や街並保存といった文化的継承だけでなく、空間的な観点での評価や都市景観、公共空間としての再評価といった観点から社会的に継承されていく必要がある。

寺院の用途転換は、危機的状況にある地方都市の寺院を建築ストックとして保存・活用し、持続的な都市環境をつくりだしていくための戦略である。例えば、使用頻度の低い寺院の本堂は、宗教法人が主体となって整備し、公益サービスの拠点として地域に開放する、「廃寺」として宗教的機能を失った寺院は、取り壊さずに自治体などが引き取り、改修・改築した上で再活用する、などである。

寺院はコミュニティのなかの重要な地理的位置を占める。これらを使われなくなったものから改修・改築した上で再活用していくことで、都市を再編成する際に、今まで培われてきた文化や風景を保存しつつ、居住環境に適した新たな公共の場をつくりだすことができると考える。

本論の目的を整理すると、以下のようになる。

- 1、現代社会において、寺院建築がおかれている状況を明らかにすること。
- 2、都市空間と寺院との関係を明らかにすること。
- 3、上記の状況を踏まえた上で、寺院建築の持続可能性を、社会的に継承していく方法を検討すること。
- 4、社会的な継承の可能性のひとつとして、寺院建築の転用という手法を実際の提案を元に検討すること。

1.2 研究の対象

1.2.1 菩提寺について

本論の研究対象は、一般的に菩提寺、檀那寺と呼ばれている寺院である。これらの寺院は檀家制度を基本とし、大都市から地方の村落まで遍く存在する。現在、その数はおよそ7万7千である。

菩提寺は檀家制度の基に成立している。檀家制度とは、檀家がその寺院に墓所を持ち住職に先祖の供養を委託する代わりに、寺院を維持する経済基盤になるというしくみである。この制度は江戸時代に、幕府による統治体制の一環である寺請け制度に端を発したものである。檀家制度は地域社会の基盤形成にも関わっており、時代が変わっても伝統的に引き継がれてきた。

しかし近年では、“葬式仏教”と揶揄されることもあるほどに、信仰対象としての仏教はその存在を弱めている。住職のいなくなった寺院は、近隣の寺院や縁のある寺院に墓地の管理と供養を委託し、存続するという形をとる。しかし、檀家が減少し、寺院を存続させる経済基盤自体が失われると、その寺院は「廃寺」とされ、取り壊されてしまうのが一般的である。

これまでは、地方都市に比べて大都市の方が非宗教的であり、檀家制度の安定性や信仰心の高さから寺院の存続は安泰と見られていた。しかし、都市部の寺院では、既に多角経営による経済基盤の確保や、様々なサービスによる檀家以外の顧客の獲得などの取り組みが行われている。一方で、地方の寺院には大都市のような戦略をとることができるだけの需要や活力が存在しているとは言い難く、今後地方都市や村落部の寺院の多くが存続の危機を迎えることは比較的容易に推測できることである。

1.2.2 対象地域について

現在、本研究室では新潟県長岡市を対象に、2050年にむけた低炭素都市像の研究を行っている。その研究の一部として、本論文では新潟県長岡市長岡地域の寺院をケーススタディとしてとりあげる。

新潟県長岡市は、平成17年から18年にかけて周囲の10市町村が合併した、新潟県内で新潟市に次いで大きな中核都市圏である。本論文の対象地域である長岡地域とは、長岡市の中心部を主とする、合併前の旧・長岡市域のことをいう。

長岡地域の人口は、19万2千人であり、これは長岡市全体のおよそ7割に相当する。長岡市全体の人口は28万3千人である。地域別の可住地人口密度では、長岡地域のみが千人を超えて高く、また夜間人口を昼間人口が上回っているのも長岡地域のみである。



交通面ではJR長岡駅(上越新幹線)、長岡インターチェンジ(関越自動車道、北陸自動車道)が立地し、首都圏や新潟市への主要アクセスが集中している。また、近郊エリアを連絡する在来線やバス交通も整備されている。大学機関や産業、ショッピングモールなども集中している、長岡市の中核エリアである。

気候は盆地のために冬は寒く夏は暑い。また豪雪地帯であり、過去に記録的な豪雪を何度も経験している。そのため、雪への対策から商店街に雪よけのための雁木が整備され独特の街並をつくっている。また、中心部の主要道路には消雪パイプが設置されている。



雁木

1.3 既往の研究

1.3.1 保存改修の基本概念

保存改修の概念が成立したのは19世紀に入ってからのものである。1964年に制定されたヴェニス憲章は、記念建造物及び遺跡の保全と修復に関する理念と実践のためのガイドラインである。これ以降、建築を修復・改修するための基本的な枠組みが整えられていった。

ヴェニス憲章は正式名称を「記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章」といい、1964年にヴェネツィアで開催された第二回歴史的記念建造物に関する建築家・技術者国際会議で承認され、1965年にICOMOS(International Council on Monuments and Sites 国際記念物遺跡会議)によって採択された。

以下に、本論文にとって特に重要だと思われる憲章の一部¹を抜粋する。

1、「歴史的記念建造物」には、単一の建築作品だけでなく、特定の文明、重要な発展、あるいは歴史的に重要な事件の証跡が見いだされる都市および田園の建築的環境も含まれる。

5、記念建造物の保全は、建造物を社会的に有用な目的のために利用すれば、常に容易になる。それゆえ、そうした社会的活用は望ましいことではあるが、建物の設計と装飾を変更してはならない。機能の変更によって必要となる改造を検討し、認可する場合も、こうした制約の範囲を逸脱してはならない。

6、記念建造物の保全とは、その建物と釣合いのとれている建築的環境を保存することである。伝統的な建築的環境が残っている場合は、それを保存すべきである。マッサ(量塊)や色彩の関係を変えてしまう新しい構築、破壊、改造は許されない。

9、修復の目的は、記念建造物の美的価値と歴史的価値を保存し、明示することであり、オリジナルな材料と確実な資料を尊重することに基づく。推測による修復を行ってはならない。

12、欠損部分の補修は、それが全体と調和して一体となるように行わなければならないが、同時に、オリジナルな部分と区別できるようにしなければならない。これは、修復が芸術的あるいは歴史的証跡を誤り伝えることのないようにするためである。

13、付加物は、それらが建物の興味深い部分、伝統的な建築的環境、建物の構成上の釣合い、周辺との関係等を損なわないことが明白な場合に限って認められる。

¹ 記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章 (日本イコモス国内委員会訳)より、<http://www.japan-icomos.org/documents.html>

以上からも分かるように、文化遺産の保存と活用に関しては、オリジナルな状態を尊重することが重要視されている。したがって、minimun intervention(最小限の介入)が望ましいとされている。

建物の保存改修に関する関連団体としては、ICOMOSの他に、IIC(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works)等の機関がある。

一方、日本での保存修復及び改修の概念が確立されたのは、明治20年代であるとされる。明治25年の東大寺大仏殿修復計画は、建築家が建造物の修復に関与するきっかけとなった出来事である。明治29年には古社寺保存教会が設立され、明治30年には「古社寺保存法」が公布された。この建造物保存の機運は、伊東忠太、関野貞、といった帝国大学工科大学造家学科の卒業生に代表される建築家の主導によって高まったものと言われている。主に中世の古社寺建築および社寺所有の宝物が保存の対象であった。

1977年から1986年までの間には、近世社寺建築緊急調査が行われた。これは、江戸時代以降に建立された神社、寺院、霊廟などの建造物の実態を都道府県ごとに把握し、保存や修復等の対策を講じるためのものであった。この調査により、江戸時代の社寺建築が文化財として指定されるようになった。

制度の変遷をみると、明治30年(1897)の「古社寺保存法」は、昭和4年(1929)に「国宝保存法」となり、昭和25年(1950)には現在の文化財保護制度につながる「文化財保護法」となっている。「文化財保護法」には、昭和50年(1975)の改正において伝統的建造物群保存地区の制度が導入され、建築単体だけではなく、重要な集落や街並の評価と保存という考え方が確立した。近年になって、建築とその周辺環境へ評価の目が向けられたこと、住民が住まいながら建造物を保存していくという立場が明らかにされたことは、建造物の保存に対する認識の大きな変化と言える。2004年には景観法が公布され、地方自治体の景観条例や協定等を後押しする形で、都市景観の保全にも目が向けられるようになった。

現在、重要文化財に指定されている建造物は4,404棟、伝統的建造物群保存地区は88地区16,512棟の建造物が選定されている(平成22年現在、文化庁)。しかし、これは全国的に建っている建造物の数と比べると非常に少なく、また指定されているものも限定的である。地域ごとの空間文化を形成している建造物には、アノニマスなものも数多く含まれているが、そうしたものを含めた地域環境の継承、更新され続ける建造物に対する公的補助などは、文化財保護の立場では限界があると言える。

1.3.2 保存改修の言葉の定義

保存のために建物に手を加える行為は、その目的や程度によって定義づけられている。そのうち、現代のニーズに即した用途に転換するための改修を行うことを、Rehabilitation, Renovation, Conversion, Regenerationなどと言う。一般的にはどれも既存の建物を使い続けて行くための措置やデザインのことである。

以下に、奈良文化財研究所による保存修復に関する言葉の定義とその整理²を引用する。

1. Preservation

現状を維持するための保存措置ないし予防措置。米語ではHistoric Preservationという表記によって、保存行為一般をも指す。

2. Restration

ある時代の状態へと形態を戻す行為。19世紀においては、失われた形態を復すること一般を指した。ヴェニス憲章においては批判的、歴史プロセスに基づく高度に専門化された修復、として定義されている。

3. Conservation and Consolidation

部材の科学的保存処置と構造・部材の強化。Conservationは、英語、ラテン系言語では保存一般を指す。

4. Reconstitution

崩壊ないし解体された建物を再び組み立て直すこと。アナスティローシス(部材の組み立て直し)、解体修理、移築を含む。欧米においては、地震、風水害、戦争、などによって崩壊したケースに対して適用されるもので、必ずしも一般的な行為ではない。

5. Adaptive Use

新しい用途に対応させるために改変を加えること。RestorationやRenovationをとまなうことになる。

² 「木造建造物の保存修復のあり方と手法」 独立行政法人文化研究所 奈良文化財研究所, 2003

6. Reconstruction

失われた建物を再建する行為。新しい材料を用いておこなわれる。オーストラリアやアメリカでは、建物の一部であれ、失われた部分を新しい材料を用いて復する行為もReconstructionとして定義されることがある。

7. Replication

複製。Reconstructionによって新築された建物をReplicaと呼ぶとらえ方もある。

8. Rehabilitation

遺産の歴史的、建築的、文化的価値の高い部分を保存しつつ、現代的利用が可能なよう修理ないし改造し、使える状態に戻すこと。(アメリカ、内務省長官による歴史的資産の保全措置基準)。建物の価値を継承しつつ、比較的規模の大きい改造を施して建物としての機能を回復する行為で、「修復再生」と訳されることが多い。

9. Renovation, Regeneration, Renewal, Conversion

建物を新築建物同様の機能を持つものとして修理・改造する行為。大規模な改造が施される。現在建築としての再生である。これらは建造物ないし遺跡単体を対象とした場合の用語であるが、都市的なスケールを対象とする場合には、Regenerationなどのまた異なることばと概念が用いられる。

以上のうち、本論文では主に9の概念と手法を中心に議論を進める。下の図は、それぞれの言葉の表す保存修復の範囲を整理したものである。本論文で扱う考え方を赤枠で示した。

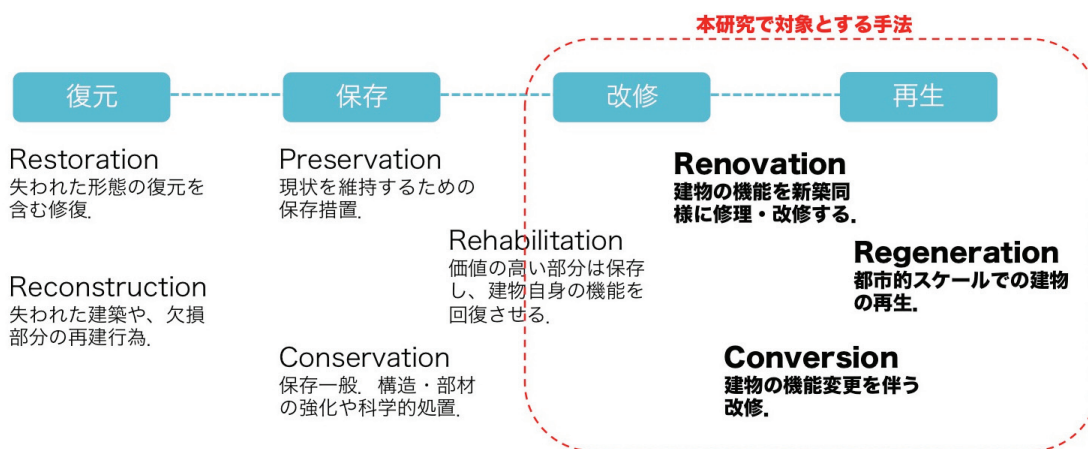


図1. 保存と改修に関する言葉の範囲

1.3.3 用途転用の歴史

建物の用途転用の歴史は、建物と用途の関係が一時的、恣意的なものであることを示唆している。

建物の用途転用の歴史は長く、特に古い街並や建築を維持してきた伝統をもつ欧米で発展してきた。例えば、下の写真はローマ時代に建設された劇場である。紀元前13年頃に建設されたこの劇場は、長い歴史の中で繰り返し他用途に転用されている。4世紀に石材利用のために一部が崩されるが、中世13世紀にはサヴェッリー族の城塞として使われた。16世紀には隣接していたオルシーニ家の住居パラッツォ・オルシーニと一体化し、宮殿となった。その後も、修復と改修を繰り返し、20世紀になってからは劇場のアーチ下にあった商店や余計な建造物が排除され、現在は上層階が集合住宅として利用されている。



Teatro Marcello(マルケルス劇場)正面

写真出典
<http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/4/45/RomaTeatroMarcello01.JPG/>



マルケルス劇場側面

写真出典
http://www.romeguide.it/teatromarcello/teatrodimarcello_romeguide08.jpg

マルケルス劇場の例ほど長いスパンではないにせよ、このような建物の用途転換は、特に歴史的に意味を持つ建造物においてしばしば用いられる手法である。他の事例としては、発電所を美術館へと転用したテート・モダン(ロンドン, イギリス)^(図1)や、酒醸造工場とその倉庫であった建物が裁判所に転用されたヘルシンキ裁判所(ヘルシンキ, フィンランド)^(図2)、都市住宅の屋根裏階を図書修復センターに転用したモーガンライブラリー修復センター(ニューヨーク, アメリカ)^(図3)、パリ万博の展示施設であった建物が移築された後ポート倉庫となり、近年に映画館を中心とした複合施設として再生した映画館MK2セーヌ河岸館(パリ, フランス)^(図4)などが、ある。これらの事例を見ても、用途転換の行われる規模や用途は非常に多岐に渡っていることがわかる。

建物の用途転用の事例

発電所→美術館



図1. Tate Modern(テート・モダン)
写真出典
<http://www.tate.org.uk/modern/building/>

酒醸造工場、倉庫→裁判所



図2. ヘルシンキ裁判所
写真出典
<http://www.tate.org.uk/modern/building/>

都市住宅の屋根裏→図書修復センター



図3. モーガンライブラリー修復センター
写真出典
<http://www.themorgan.org/about/historyImage.asp?id=67>

万博展示館→ボート倉庫→映画館



図4. 映画館MK2セーヌ河岸館
写真出典
「世界のコンバージョン建築」(小林克弘, 三田村哲哉, 橘高義典, 鳥海基樹 編集 鹿島出版社, 2008年4月, p178)

また、災害時に学校体育館が緊急の避難所や臨時教室として使われるといった事例^(図5,6)もある。こうした一時的なものも用途転用と言えるだろう。



図5. 震災後、学校教室として使われた体育館



図6. 避難生活所となった体育館

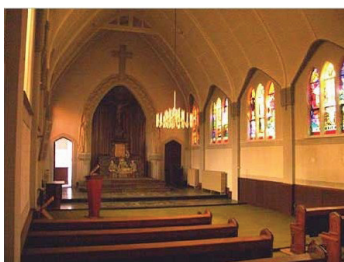
写真出典
神戸市HP、阪神淡路大震災、震災記録写真集
<http://www.city.kobe.lg.jp/safety/hanshinawaji/data/photo/>

通常、建物にはあらかじめ用途が設定されている。しかし、こうした事例からは建物と用途の関係は非常に恣意的かつテンポラリーであると言える。建物をハコと見なし、用途、つまり中身を入れ替えるという考え方は、歴史性や時代性を含む建物を、現代都市に適応させ使い続けていくための有効な手段であると言える。

国内において寺院建築の用途転換事例はほとんどない。だが、古い建築の増改築の伝統を持つ欧米では宗教施設(主に教会や修道院)をコンバージョンした事例は数多く存在する。この場合も、宗教建築であることに関わらず転換後の用途は多様である。用途転換後の主な例としては、住宅、宿泊施設、博物館、レストランなどが挙げられる。

イギリスでは、教会や礼拝堂をコンバージョンし、住宅や商業建築として再活用している事例が数多く存在する。RICS(The Royal Institution of Chartered Surveyors)によると、ロンドン付近では最近の5年間で500あまりの教会が住宅に変わったということである。³ インターネットでイギリスの不動産サイトへアクセスすると、教会をコンバージョンした住宅を購入するための様々な情報が載っている。

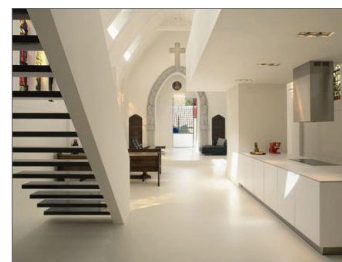
<教会建築を用途転用した事例>



コンバージョン前の礼拝堂



住宅にコンバージョン後



写真出典 http://www.treehugger.com/files/2008/01/chapel_convertite.php

³ Buying a Church Conversion from Our Property.co.uk (http://www.ourproperty.co.uk/guides/buying_a_church_conversion.html)

建築保存と用途転用という2つの立場から興味深い事例として、海外の事例からは教会をブックストアへ用途転換した事例を、国内では寺院を移築し音楽堂とした事例を挙げておく。

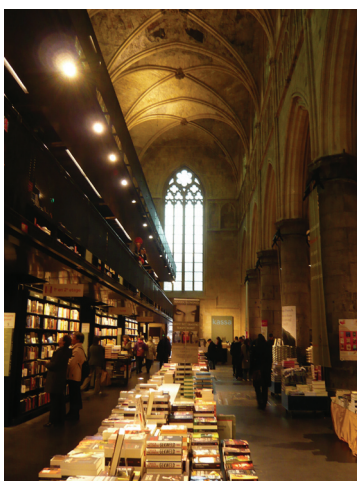
Selexyz Bookstore (設計 Merkx + Girod)

所在地: Dominikanerkerkstraat 1, 6211 CZ Maastricht, The Netherlands

オランダの街マーストリヒトの中心地区にある古い教会をブックストアに用途転用した事例である。かつての教会は街のシンボルのひとつだったため、外観と構造をそのまま残し、天井や壁は修復している。内部にはかつての荘厳な空間が再現されている一方で、鉄骨フレームの架構を挿入することで3階分の本棚をつくり出している。石造りの<過去>と、黒い鉄骨の<現在>の対比がうまく調和し、魅力的な空間が作り出されている。



外観



内観

左に見える鉄骨の架構は3階立てになっている。



かつての祭壇はカフェになった。



上: 天井画は修復されている。

左: 既存の構造を囲むようにして、鉄骨のフレームが挿入されている。

※写真はすべて筆者撮影による

かやぶき音楽堂

所在地：京都府南丹市(旧船井郡)日吉町

かやぶき音楽堂は、福井県にあった禅寺、善応時の旧本堂を移築し、音楽堂として使用している事例である。元々の寺は1784年に建てられたもので、廃寺になったものを、ピアニストのザイラー夫妻が譲り受け、修復を施した上で音楽堂とした。屋根は茅葺きで、本堂の広さは約120畳。音楽堂内は小屋部分も含め3階席まで設けられ、約300人が収容できる。

ザイラー夫妻はこの音楽堂での春と秋に定期公演を行っているほか、コンクールなどのイベントも行っている。コンサート開催日には全国から人が集まってくるために、普段は無人の最寄り駅にも、特急電車が臨時停車するという。寺院のリノベーションが、毎年数日間、地域に活気をもたらしている事例である。



かやぶき屋根の音楽堂、外観

写真出典
http://k-kamaken.cocolog-nifty.com/blog/P64_35.jpg



演奏会の様子、音楽堂室内

写真出典
日経新聞, 2011年1月15日夕刊「まさかの千客万来・4」より

情報源:

かやぶき音楽堂ホームページ(<http://www.eonet.ne.jp/~kayabuki/index02/indexJ02.htm>)
日経新聞, 2011年1月15日夕刊「まさかの千客万来・4」

1.3.4 建物の用途転用に関する既往研究

コンバージョンに関する既往研究としては、小林克弘らによる一連の事例研究⁴がある。これは、イタリア、ドイツ、フィンランド、アメリカにおけるコンバージョン建築の実態調査と言えるもので、2004年から2008年にかけて行われた。調査の方法としては、1990年から近年までの各国の建築雑誌を調べ、掲載された建築の中からコンバージョンの手法をとっているものを抽出するという形がとられている。この研究は、「世界のコンバージョン建築」(小林克弘、三田村哲哉、橋高義典、鳥海基樹 編集 鹿島出版社、2008年4月)にまとめられている。

小林克弘らは、これらの事例調査から、コンバージョンの手法や種類を、次の4つのタイプ—①対比的融合(fusion)・②質的大変貌(metamorphosis)・③偶発的増殖(casual)・④歴史的重層(histric)に分類している⁵。

①対比的融合(fusion)とは、コンバージョンの際に既存建築に新しいデザイン要素が持ち込まれ、それが既存部分との対比しつつ、ひとつの建築として融合するというタイプを言う
②質的大変貌(metamorphosis)とは、既存建築と全く異なる用途へとコンバージョンされる際に、デザイン的な変化よりも内部のプログラムや建築自体の質が大幅に変化するタイプ

⁴ 小林克弘らによる一連の事例研究:

「イタリアにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その1): 1990年以降のイタリアの建築雑誌に見られる傾向」

「イタリアにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その2): 産業系施設からの転用におけるデザイン手法」

「イタリアにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その3): 居住系施設からの転用におけるデザイン手法」

「イタリアにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その4): 公共系施設からの転用におけるデザイン手法」

椎橋武史・井上めぐみ・小林克弘・黒橋秀治・木下央・佐々木章行・三田村哲哉・千賀順・小川 仁, 2004年8月

「アメリカにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その1): 近年の傾向および事務所・居住系施設からの転用におけるデザイン手法」

「アメリカにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その2): 産業系施設からの転用におけるデザイン手法」

「アメリカにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その3): 公共系施設からの転用におけるデザイン手法」

「アメリカにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その4): 埠頭施設の再利用最新事例にみる設計計画の新動向」

小林克弘・黒川直樹・木下央・三田村哲哉・椎橋武史・遠藤広基・中西康嵩・沢田聡・福中海人・宮部貴寛・谷泰人, 2007年

「ドイツにおけるコンバージョン建築事例の調査研究: 産業系施設、公共系施設からの転用におけるデザイン手法」

谷泰人・小林克弘・三田村 哲哉・角野 渉, 2008年

「フィンランドにおけるコンバージョン建築事例の調査研究: 産業系施設からの転用におけるデザイン手法」

小林克弘・三田村哲哉・谷泰人・角野渉, 2008年

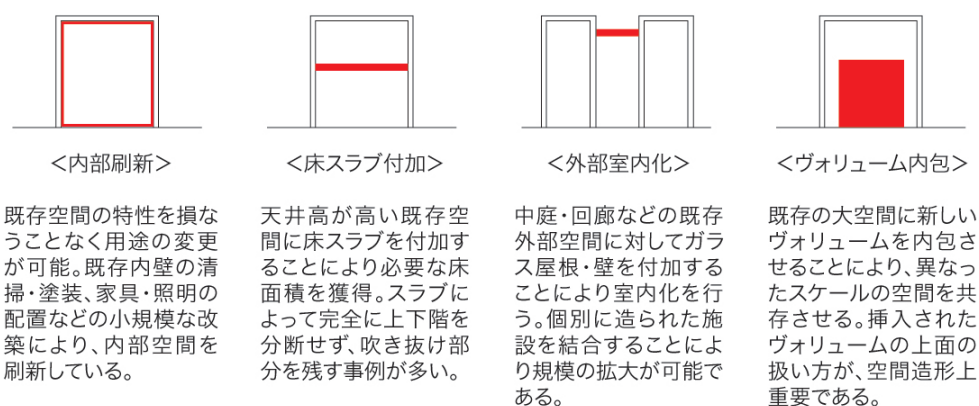
⁵ 「SD 2005」p69-100, 特集2: コンバージョン・デザインの可能性(イタリアの事例), 首都大学東京小林克弘研究室より引用

を言う。例えば、修道院からホテルへ、発電所が展示施設へ、といった場合において、平面形や空間自体は巧みに継承されるが、プログラムとしてはまったく別の建築として再生するといった事例がある。③偶発的増殖(casual)は、①の対比的融合や②の質的大変貌に比べ、より自然な改修・改築が行われるタイプを指す。例えば、単体の建築が長いスパンで増改築が繰り返される例や、ある地区で複数の建築が順次改築され、地区全体の性格を変えていく例、などがこれにあたる。④歴史的重層(histric)とは、既存建築が歴史的な重要性を兼ね備えている場合のコンバージョンを指す。これには大別して2つのタイプがある。ひとつは、保存再生的発想によるもので、既存建築を損なわないようなデザインの配慮のもとに新規部分が付け加えられるものである。もうひとつは、保存再生の観念が発達する以前からの手法で、マルケルス劇場の事例(前掲, p12を参照)のように、建築に手をいれて使い続けていく、という発想のもとに行われている例である。

また、転用前の用途による分類も行われている。工場や倉庫といった用途に使用されていた「産業系」・パラッツォや修道院などに使用されていた「居住系」・教会や病院等の公的な活動の場として使用されていた「公共系」の3つである。

さらに、イタリアの事例研究からは、用途転換の手法についても考察が行われており、その結果、4つの手法—①内部刷新・②床スラブ付加・③外部室内化・④ヴォリューム内包、が示されている。

イタリアにおける事例の、転用手法の分類(小林, 2004)



出典:「イタリアにおけるコンバージョン建築事例の調査研究(その4):公共系施設からの転用におけるデザイン手法」
椎橋武史・井上めぐみ・小林克弘・黒橋秀治・木下央・佐々木章行・三田村哲哉・千賀順・小川 仁, 2004年8月

1.4 論文の構成

第1章では、既述のように本研究の目的と背景、対象、既往研究について述べる。

第2章では、宗教社会学、都市史と社会史、景観論という3点の異なる立場から、現代の寺院がおかれている状況を明らかにする。

宗教社会学の観点からは、日本人の宗教意識について戦後の調査結果を概観し、日本人の宗教観とはどのようなものか明らかにする。また、現代における葬祭ビジネスとの関わりから、寺院の果たす役割についても確認する。そして、仏教が現代人にとってどのような意味もっているのかを明らかにする。

社会史、都市史的観点では、都市や文化が発展する中で、それらと寺院の関わりを明らかにする。そして、その延長線上にある、現代都市における寺院の試みを事例収集し、まとめる。

景観論的観点からは、景観の中での、都市空間と寺院の関係を分析し、寺院が日本固有の原風景のひとつであり、多くの人に親しまれている価値ある景観をつくりだしていることを明らかにする。そして、最後に3つの観点から、現代における寺院の存在意義についてを考察する。

第3章では、新潟県長岡市長岡地域の寺院をケーススタディーとして、調査、分析を行う。寺院の分布や類型の整理を行い、寺院関係者へのヒアリングをまとめる。また、第2章での景観論的観点からの考察を受けて、景観の中の寺院という観点から、写真と図を用いた分析を行う。寺院の景観的特性を示し、長岡地域における寺院のある風景とはどのようなものかを記述する。また、都市の一施設として、長岡地域内の各種施設との分布や面積比較を行い、この地域における寺院の建築ストックとしての有用性を示す。

第4章では、寺院の用途転換について、長岡地域を対象とした提案と検討を行う。第3章での分析をもとに、長岡地域での寺院建築の用途転用について、具体的な改築のモデルケースを提案する。

第5章では、第1章から第4章までの議論と分析を受けて、寺院建築の用途転用の可能性について再検討すると共に、本論で検討した戦略が寺院存続のための有効な手法であることを示す。

第2章 現代における仏教寺院と都市

第2章では、現在寺院の置かれている状況を明らかにするために、宗教社会学、社会史と都市史、景観論、の3つの観点から、状況把握を行った。

宗教社会学では、戦後以降の国民意識調査のデータとその解説をもとに、日本人の宗教意識の変遷を追い、現在人々が仏教寺院に対してどのような認識を持っているのかを明らかにした。特に、個人の信仰と家の宗教、多重信仰、など日本人特有の宗教意識を理解することで、現在の檀家制度の抱える問題点が明らかになった。

次に、社会史と都市史の双方を概観し、寺院が社会とどのように関わってきたを明らかにした。中でも、江戸時代の娯楽空間としての寺院境内のあり方は、信仰以外での都市や人との強固な結びつきといった点で非常に興味深いものであった。また現代都市における寺院の新しい取り組みとして、本堂をイベント空間として貸し出すなどの事例が見られた。

そして、景観論的観点からは、寺院が景観の中でどう捉えられているのかを、意識調査、絵画、景観選定事業、の3点から読み解いた。その結果、寺院が都市のランドマーク、ひいては日本固有の景観要素のひとつとしての重要性をもっていることがわかった。

章の最後では、以上を踏まえた上で、寺院が現代社会においてどのような意味をもっているのかを総合的に考察した。

2.1 宗教社会学からみた仏教と寺院

2.1.1 統計調査にみる宗教心の変化

日本人は概して宗教的ではないと言われている。だがしかし、宗教は通過儀礼や年中行事として、季節ごと、人生の節目ごとに日本人の生活と関わり続けてきた。信仰の有無を問うだけではなく、慣習や文化との関連にも留意して現代人と宗教の関わりをみていく。

a. 日本人と宗教—概論

文部科学省発行の「宗教年鑑」¹によると、現在日本には18万をこえる宗教法人が存在する(図1)。そのうちの5割が神道系、4割が仏教系である。それぞれの宗教の信者数の統計を見ると、最多が神道系の1億582万人、次いで仏教系の8954万人、諸教系908万人、キリスト教系214万人となっている(図2)。神道系、仏教系が圧倒的に主流であることがわかる一方、この信者数の総計は日本の総人口をはるかに超える数字となる。これは日本人独特の宗教観の現われだといえる。

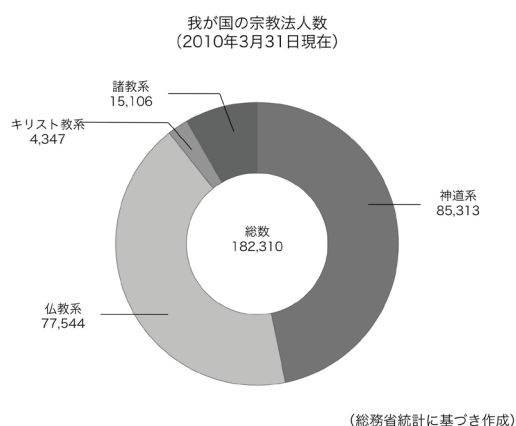


図1.

この数字は国民の自発的な申告に基づいている訳ではなく、各宗教団体からの申告によって統計されている数字である。それが人口よりはるかに多い宗教信者数の理由である。したがって、この数字が国民の意識を反映しているとは言いがたい。

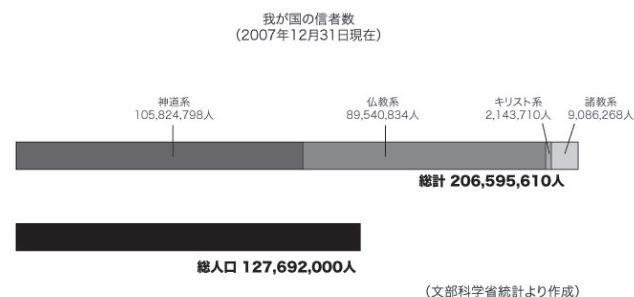


図2.

神道系の信者数は、神社の氏子区域にすむ住民や神社の活動に協力している「氏子」と、氏子区域外であるがその神社に崇敬の念をもつ「崇敬者」の2種類の合計からなる。崇敬者の数は、例えば伊勢神宮の場合はお札の数の頒布数などから算出されるという。また、氏子の数も神社の規模、行事や町内会との関係性などによって、各神社に大きな差が

¹ 『宗教年鑑 平成20年版』文化庁編, 2009年12月、および文部科学省HP内 宗教統計調査 統計表一覧より (<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001061246>)

仏教系の信者数は主に檀家の数が数字に反映されていると考えられるが、これも個人の自発的信仰と直接結びついているものではないことに留意すべきである。後述するが、家の宗教や先祖崇拜といった認識が強い傾向がある。

しかし我々の生活をみると、家の中に神棚と仏壇が両方ある家、宗派に関係なく行われるチャペルウェディング、秋祭りや七五三への参加、合格祈願、といったように、多くの人の間では特定の宗教にこだわらない文化が浸透している。こうした多重信仰に加えて、仏教、神道、キリスト教などのメジャーな宗教に対する親しみが高いことも、日本人の宗教観の独特な点であると言える。キリスト教等の一神教の排他性を考えれば、翻って、こうした文化には古くから八百万の神といった観念をもつ日本人の、宗教に対する寛容性が現われているとも言える。延いては、先に挙げた信者数が必ずしもオーバーカウントであるとは言えず、ある程度の事実を孕んでいると見る事が出来る。日本人の宗教観は、統計だけでは非常にあいまいである。そこで次に、各時代の意識調査を通して、日本人の実際の宗教心を追っていく。

b. 現代人の宗教意識

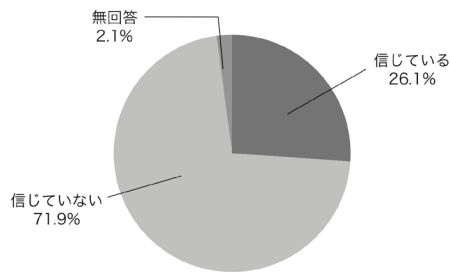
現代人の宗教意識について、最近行われた意識調査の結果をみていく。取り上げるのは、NHK放送文化研究所が行った第8回「日本人の意識・2008」調査と、読売新聞が2008年に行った宗教観をテーマとした調査「日本人」の2つの調査結果である。

NHK放送文化研究所は、「日本人の意識」と題した国民の意識調査を、1973年から継続して5年おきに実施している。調査対象は全国の16歳以上の国民5,400人(層化無作為二段抽出)で、調査方法は個人面接法である。2008年実施の際の有効回答数は3,103人(有効回答率57.5%)であった。質問内容は、人間関係、政治意識、生活に対する基本的価値観、ナショナリズム、天皇に対する感情、宗教意識などである。

読売新聞世論調査部は、1952年に始まった宗教意識に関する世論調査をひきついで、宗教観をテーマに年間連続調査を行っている。調査対象は全国の有権者3000人で、調査方法は個別訪問面接聴取である。2008年の調査では有効回収数は1837人(回収率61.2%)であった。

まずはじめに、読売新聞の調査結果から、信仰の有無に関する質問の結果をみる。「あなたは、何か宗教を信じていますか」という質問に対して、「信じている」と回答した割合は26.1%、「信じていない」と回答した割合は71.9%であった。年代別では、「信じている」と回答したうち、20歳代は14%と最も低く、70歳代の41%が最も高かった(図3)。

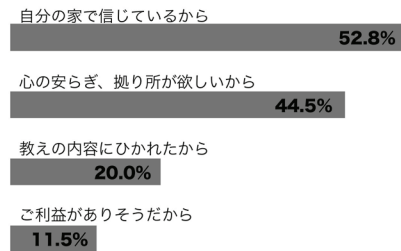
Q. あなたは、なにか宗教を信じていますか



(読売新聞 宗教観の連続調査「日本人」2008年より作成)

図3.

Q. (前問で「信じている」と回答した人のみ) あなたが宗教を信じていると感じる理由を、次の中から、あればいくつでもあげてください。



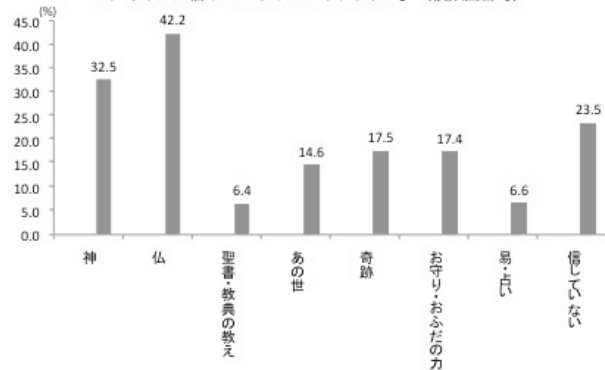
(読売新聞 宗教観の連続調査「日本人」2008年より作成)

図4.

「信じている」と回答した人の理由としては、「自分の家で信じているから」の52.8%が最も多く、次いで「心の安らぎ、拠り所が欲しいから」の44.5%、「教えの内容にひかれたから」の20%、「御利益がありそうだから」の11.5%であった(図4)。

一方、NHK放送文化研究所による同様の質問では、「何か宗教や信仰をもっているか」という質問に対し、最多の回答は42.2%の「仏」、次いで「神」が32.5%、「信じていない」が23.5%であった。宗教の本質とも言える「聖書・教典の教え」は6.4%と最も少ない結果となった。また、年齢別に見ると、60歳代以上で「仏」を信じる人の割合は7割を超え、10歳代、20歳代では2割に満たない。

第28問 「また、宗教とか信仰とかに関係すると思われることから、あなたが信じているものがありますか」(複数回答可)



NHK放送文化研究所「日本人の意識・2008」より

図5.

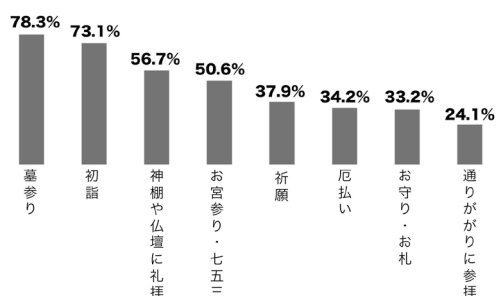
読売新聞の調査結果からは、全体の7割は宗教に対する明確な信仰をもっていないことがわかった。また、3割ほどの信仰を持つ人の理由は「家の宗教である」という受動的理由が最多であることがわかった。NHK放送文化研究所の調査結果からは、何らかのかたちで漠然とした信仰は持つものの、宗教に対する信仰には至らないことが伺える。

また、両方の結果で共通して、信仰を持つ人には高齢者が最も多く、若者層が最も少ないという結果が得られており、家制度と共に慣習としての信仰が残っていること、若者の自発的信仰は非常に少ないことが推察される。

宗教的行動に関しては、読売新聞の調査からは、最多が「墓参り」の78.3%、次いで「初詣で」の73.1%、「神棚や仏壇に手をあわせる」56.7%、「お宮参り、七五三」50.6%、「身の安全、商売繁盛、入試合格などの祈願」が37.9%という結果であった(図6)。一方、NHK放送文化研究所が行った同様の質問では、最多が「墓参り」の68%、次いで「お守り・お札を身の回りにおく」の34.9%、「身の安全や商売繁盛、入試合格などの祈願」の30%という結果であった(図7)。

いずれの結果でも最多となったのが、「墓参り」である。読売新聞の調査では、「宗教を信じている」と回答したうちの84%が「墓参り」をすると回答したが、「宗教を信じていない」と回答したうちの77%も、「墓参り」をすると回答している。同様に、「初詣で」を行う人の割合も、「宗教を信じている」人のうちの72%、「宗教を信じていない」人では74%と、信仰の有無に関係なく行われていることがわかる。また、「祈願」「お守り・お札」などの現世利益的なことも多く、これは前述したNHK放送文化研究所の「信仰の有無」に関する質問とも関連している。つまり、特定の宗教に対するものではないが、縁起やご利益といった形での信心はあるということである。同様に、「お宮参り・七五三」などの行為も慣習や通過儀礼といった形の信心であると解釈できる。

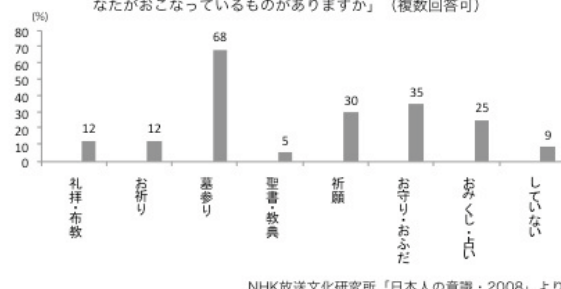
Q.次の宗教に関することの中で、あなたがしていることや、したことがあれば、いくつでもあげてください。



(読売新聞 宗教観の連続調査「日本人」2008年より作成)

図6.

第27問 「宗教とか信仰とかに関係すると思われることから、あなたがおこなっているものがありますか」(複数回答可)



NHK放送文化研究所「日本人の意識・2008」より

図7.

読売新聞の調査で、「日本人は宗教心が薄いと思うか」という質問に対しては、45%が「そう思う」と回答し、「そう思わない」と回答したのは49%と、同程度であった。一方、「先祖を敬う気持ちをもっているか」との質問に対しては、94%が「もっている」と回答した。この回答を年齢別に見ると、30歳代以上は9割超、60歳代以上では98%が「もっている」と回答。20歳代でも86%であった。

この結果は、上記の宗教行動の結果と合わせるとより明確になるが、日本人の宗教意識、宗教行動は、信仰に基づくものより先祖供養の意味合いが強いことを表している。

その一方で、先祖供養と家の宗教の乖離が、読売新聞の調査における次の質問によって明らかにされている。「自分の葬式や墓をどうしてほしいか」という質問に対し、葬式に関しては「無宗教の葬式にしてほしい」と回答した人が39.1%いた。これに対し、「そうは思わない」との回答は48.5%と上回った。しかし、「無宗教の葬式」と答えた人の年齢のうちわけを見ると、20～40歳代が多数を占め、中でも20歳代は半数以上の55%が「無宗教」と回答している。これには、近年の葬儀の簡略化や多様化も影響していると思われるが、若年層の宗教心の希薄化ともとることができる。また、墓に関しては、「先祖代々の墓に入る」が最多の56.1%で、この年齢内訳は、70歳代以上が69%、30歳代は最低の45%であった。次いで「今の家族だけの墓に入る」が23.6%と、墓に関しては旧来の方法を選択する人が多数であった。しかし、「散骨」と回答した人が7.9%で、そのうち40歳代が12%という数値であったことは、既に一部の人々の間で墓や先祖に対するこだわりが希薄化してきていることの表れだと考えることができる。

また、読売新聞による「今の宗教団体に対して感じること」という質問では、「どういう活動をしているのかわからない」という回答が最多の46.8%となった。同様に多かったのが「強引な布教活動」の42.5%で、宗教への不信感が現れる結果となった。また「高額の寄付やお布施を集めている」が36%、「宗教とは無関係なビジネスに熱心」の22.4%にみられるように、“宗教と金”の問題に対する批判も多い。そして「政治とのつながりが強い」「宗派間の対立が多い」といった宗教団体のあり方に対する批判、「人道や福祉などでの社会貢献が足りない」「尊敬できる宗教家が少ない」というような宗教の姿勢に対する批判もあげられている。

信心や先祖供養といった自発的宗教行為を行う人は多くても、宗教団体や宗教家に対しての不信感や批判がある。ここから言えることは、一般の人々の信仰心と宗教自身の間には大きなギャップが存在し、宗教団体や宗教家はそのギャップを埋めることができていないということである。

このことに関連して、「最近の日本人のモラルの低下は、宗教心が希薄であるからだ」という質問をみると、「そうは思わない」が78.5%という結果となっている。つまり、宗教が行動規範や倫理観であると考えない人が多数を占めているということである。ここにも、現代の宗教に対する批判の裏をみてとることができる。

なお、以上の調査結果については、簡易版を巻末にまとめた。

出来る。

c. 時代による宗教意識の変化

次に、戦後以降の国民意識調査の変遷を追い、現代人の宗教意識は過去と比較してどのようなものであるのか、日本人の宗教意識はどのように変わってきたのかをみていく。

右のグラフは「信仰を持っているかどうか」の質問に対して「信仰をもっている」と答えた人の割合を時代の推移とともに表したグラフである。戦後間もない1946年から1955年には、「信仰あり」と答えた人が全体の5割から7割前後いたことがわかる。その時期をピークとして「信仰あり」とする人の割合は徐々に減少している。1960年の時点では、統計数理研究所の調査では既に「信仰あり」と答えた人が半数を下回っている。読売新聞の調査では5割程度である。1955年から1975年の間で、半数以上であった「信仰あり」の割合は半数以下に減少している。高度経済成長の時期と重なることから、ものの豊かさや生活構造の変化、都市化に伴う人口流動などの様々な現象が、宗教意識にも影響を及ぼしているのではないかと考える説もある。1975年から現在までは、「信仰あり」の割合は多少の増減を繰り返しながらゆるやかに減少している。以下、その様子を詳しくみていく。

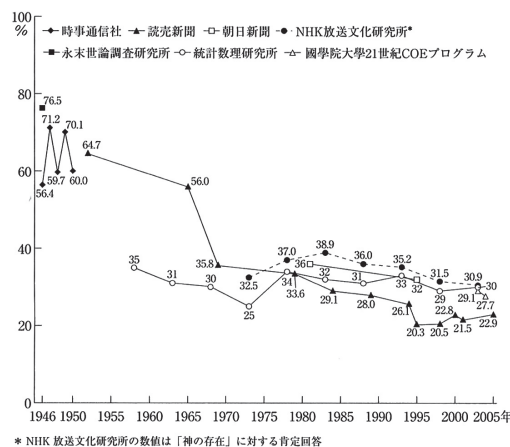


図1. 「信仰あり」と回答した人の割合と時代の推移

戦後まもない昭和20年代(1945～)には、時事通信社による「日本民主化の歩みに関する世論調査」(1946-50)、迷信調査委員会による「国民慣習(迷信、俗信)調査」(1946, 49,50)、読売新聞による「全国世論調査」(1952)、等の宗教意識に関する調査が行われた。当時の読売新聞の世論調査で、調査目的として述べられている時代背景は非常に興味深い。それは次のようなものであった。

「敗戦という未曾有の事態に直面、国民の思想は大きく動揺、その間隙に乗じて幾多の新興宗教が発生した。(中略)こうした不安定な世相に対し既成の宗教団は国民の悩みを自己の悩みとしく生きた宗教>として信仰を集めているとはいえない。(中略)日本国民の信仰生活の実状を明らかにするとともに、宗教に対する国民の考え方を知らため、本社ではこのほど信仰に関する全国調査を行った(1952年10月22日)」¹

図1 出典:「データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版」石井研士 著, 新曜社, 2008年2月, p4

¹ 「データブック 現代日本人の宗教 戦後50年の宗教意識と宗教行動」石井研士著, 新曜社, 2002年9月,p10

ここで注目すべきは、戦後既に既成の宗教に対する信頼の欠如、つまり旧来の神道や仏教に対する国民の信仰が失われていることが前提とされている点である。

昭和20年代の調査結果でまず注目されるのは、信仰の有無に対して「信仰有り」とする人の割合が、いずれの調査でも全体の5割を超えていることである。最も低い数値で56.4%、最も高い数値は71.2%である。また、読売新聞の調査における「宗教の必要性」への回答は、7割以上が「必要」と答えている。また、「信仰あり」と答えた人の中で、仏教系を信仰している人の割合はいずれも全体の3～5割以上という回答が得られており、神道やキリスト教よりも上回っている。これらの結果からは、一見仏教を中心として何らかの信仰を持つ人の割合が高いように見られるが、そうではない。読売新聞の調査と迷信調査委員会の調査はこの時、信仰の対象を「個人の宗教」と「家の宗教」にわけている。その結果、「個人の宗教」では信仰対象として5割前後の回答を得た仏教が「家の宗教」だと9割近い回答を得ている。つまり、当時の日本においての仏教は、「家の宗教」としての認識が非常に高かったということである。この認識の差は現在まで変わらず、日本人の宗教意識の一つのスタンダードとして考えることができるものである。

また、上述の“既成の宗教”への批判や不信感に対する設問もある。宗教に望むこと（読売新聞、1952年）では、「あなたは従来宗教に対して何か望むことや改めてほしい点がありますか」との質問に対して、「宗教家は設けすぎる（寄付を要求しすぎる）」が16.9%、「現代人に向くような教理の説き方をせよ」が15.6%、「社会生活と結びつけ」が15.1%、といった意見が多数を占めた。この結果は、現代の日本人が宗教団体に感じることと、重なる部分がある。

昭和30年代（1955～）に入ってから、継続的に宗教意識調査が実施されるようになる。昭和30年代、40年代には統計数理研究所によって、継続して調査が行われた。50年代以降は統計数理研究所による「日本人の国民性調査」が1953年から5年ごとに1993年まで実施された他、NHK世論調査部による「日本人の意識」調査が1973年から5年ごとに実施され、1981年には定期調査とは別に宗教に関する世論調査も行っている。また、読売新聞、朝日新聞、等が継続的な調査を実施した。

この時期の各調査を総合的に見ると、多少の矛盾はあるものの、昭和30年代以降、日本人の宗教性は低下しているというデータが得られている。1958年から1973年まで、宗教を信仰する人の割合は減少している。1958年以降の宗教性の低下は、主に「家の宗教」を信仰する人の割合の減少である。神道やキリスト教に関しては、この時期に「信仰する」と回答した人の割合に大きな変化は見られないが、仏教では1958年に24%であった割合が1973

年には18%と減少した。仏教系の内訳を見ると、「その他の仏教」の項目に減少が見られ、ここでの「その他の仏教」は「家の仏教」と見なされている。「家の宗教」の減少には、高度経済成長に伴う都市化と人口流動、生活構造や価値観の変化、合理性の追求、などが影響しているとする説がある。仏壇や神棚を持たない家が増えたのもこの時期である。

1973年から1978年の間で一時的に「何らかの信仰を持っている」とする人の割合が9ポイント上昇し、これを「宗教回帰」と呼ぶ説がある。この調査結果から世の中は宗教ブームであると言われ、ニューサイエンス、ニューエイジ・ムーブメント、新・新宗教、精神世界、第三次宗教ブーム、などといった用語が出現した。しかし1978年に「信仰あり」とする人の割合が上昇した以降は、割合は不安定な変化を続けているため、宗教に対する回帰があったのかどうかは断定できないとされている。

昭和50年代以降の調査では、社会の高齢化に相まって、調査の回答者の高齢者の割合が増えてゆき、いずれの調査でも、高齢者割合は半数を超えるようになる。するとそこで、加齢とともに宗教意識を持つ人や宗教的行動をする人の割合が高くなるという傾向が見られるようになった。しかし、更に重要なことは、年齢層別の信仰心のデータを比較すると、時代を経るごとに高齢者の中での信仰を持つ人の割合は減少傾向にあるということである。つまり、全年齢的な宗教心の低下という数値は、高齢者の宗教心の低下に大きく影響を受けていることになる。比較的宗教的であり、神社仏閣とも深い関わりを持つと見られる高齢者層の宗教心の低下は、主に伝統宗教離れを表しているといえる。

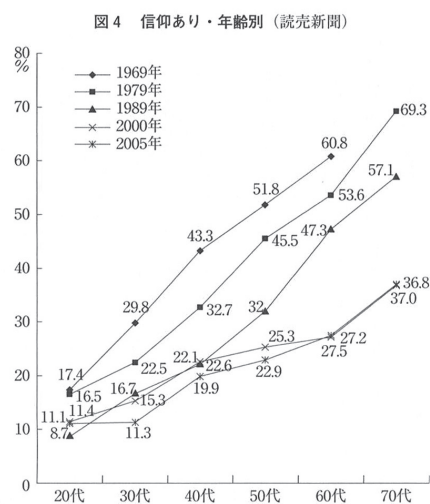


図2. 「信仰有り」の割合、年齢別時代推移 (読売新聞社、2005年)

以上のように、統計からは戦後60年程の間に、日本人の宗教心は減少した。特に高齢者の宗教心の低下は、伝統的な宗教観がこの間に消滅していったということを意味している。「家の宗教」としての仏教の衰退も、現代人の宗教心の希薄化へとつながる。

図2 出典:「データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版」石井研士 著, 新曜社, 2008年2月,p11

d. 家の宗教という観念

ここで、既出のキーワードである「家の宗教」についての概略を述べておく。「家の宗教」とは、主に仏教のことを指している。これは、江戸時代以来の檀家制度に基づき、多くの家が代々に渡り菩提寺を持っていることに由来する。つまり、子供は生まれた時から「家の宗教」が決まっており、法要や先祖供養を通じて習慣の中で宗教を身につけていくのである。

この「家の宗教」は、戦後の宗教意識調査の中で既に明文化されている。読売新聞と迷信調査協議会はそれぞれ「家の宗教」と「個人の宗教」をわけて統計をとっている。その結果両者の間には大きな開きが出た。「個人の宗教」を持つ人の宗教別の割合をみると、「仏教系」の占める割合は半数からそれ以下となり、「信仰を持たない」人の割合が増える。それに対して「家の宗教」を持つ人の場合は、「仏教系」が8割から9割を占めている。つまり、昭和20年代の「信仰有り」が5割から7割であ

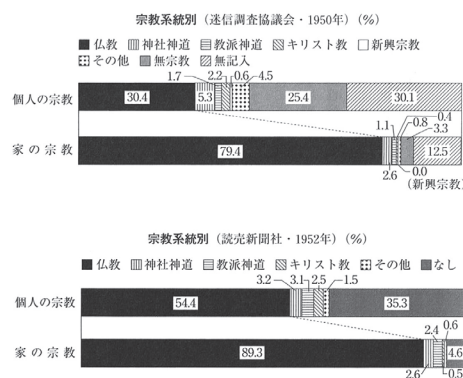


図3. 「家の宗教」と「個人の宗教」

ったという結果は、「家の宗教」を信仰している人の割合が大きいことによるものとも言えるのである。1952年に読売新聞が行った調査では、「信仰の理由」として最多の回答が「家の習慣から」であった。

現在の日本人の信仰のなかにも、「家の宗教」という要素は依然として存在する。しかし、その存在は非常に弱まっているということが、JGSS²による調査結果より示されている。2000年と2001年に実施された調査の中では家の宗教に関する調査が行われている。JGSSの調査を元に、この現象について分析を行った木村雅文の論文「現代日本人と“家の宗教”」³では、次のようなことが明らかにされている。

図3 出典:「データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版」石井研士 著, 新曜社, 2008年2月、p23

² JGSS: 日本版General Social Surveys (JGSS)は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて(1999-2003年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである(研究代表:谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事:佐藤博樹・岩井紀子、事務局長:大澤美苗)。東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJデータアーカイブがデータの作成と配布を行っている。

³ 「現代日本人と“家の宗教” —JGSS-2000/2001からのデータを中心として—」木村雅文, 2003

JGSSの調査からは、「あなたは信仰している宗教がありますか」という質問に対して、「ある」が1割前後、「特に信仰していないが、家の宗教はある」が2.5割程度、「ない」が6割前後という結果が得られている。その年齢層別の結果が(図4)である。この図からは、「ある」「特に信仰していないが家の宗教はある」とする割合は共にピラミッド型となっており、年齢とともに割合も高くなることがわかる。20歳代では、「家の宗教」を持つ人の割合が2割に満たないのが、70歳代以上では半数以上となっている。「彼ら(70歳代以上)は、第二次世界大戦の前か中に普通教育を受けて育った世代であるし、社会構造的にも“家の宗教”に触れやすい世代であった。」(木村雅文、前掲論文)

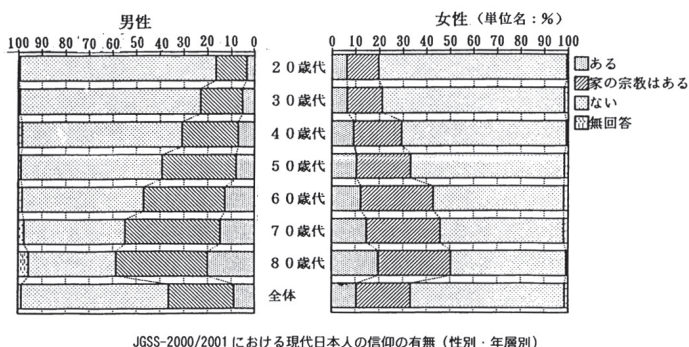


図4. 年齢層別、信仰の有無

また、集計結果を地域別にみたものが(図5)である。他地域に比べて特に関東の「(信仰)ある」の割合が極端に少ない。これは、「東京と中心とする世俗性の強い都市圏を含んでいるためであろう」「とくに「家の宗教はある」が20%を切っている事実は、この地域で核家族化や単身世帯化が非常に進んでいるという構造変動を表しているものと思われる」(木村雅文、前掲論文)

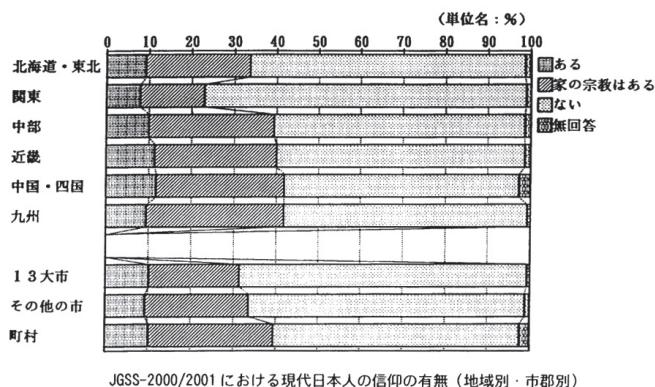


図5. 都市・地域別、信仰の有無

図4.5 出典:「現代日本人と“家の宗教” —JGSS-2000/2001からのデータを中心として—」木村雅文, 2003

しかし木村は論文中で、さらに違いが明確に現われているのは市群別のデータであると述べている。「信仰している宗教がある」と回答した割合はほとんど差がないが、「家の宗教はある」と回答した割合には都市規模によるはっきりとした違いが出ているからである。「信仰している宗教がある」割合については、「マス・コミュニケーションなどで大衆文化がすみずみにまで行き渡っている現代日本社会では、脱宗教化は都市規模ともはや関係ないところにきているのかもしれない」(木村, 前掲論文)と述べる。そして「家の宗教はある」という回答が町村に行く程高く、大都市になるほど低くなるというデータから「日本の宗教文化が個人的と言うより、やはり家と村を中心とした集団主義と言われる社会的な基礎の上で成立していた名残」の表れであると述べている。

また、神棚や仏壇の所有状況も、「家の宗教」の認識の度合いに関わってくる。第一生命経済研究所が、全国の40歳から74歳までの男女1000人を調査した「日常生活における宗教的行動と意識調査」⁴から、神棚と仏壇の保有状況についての調査結果を引用する。「子供の頃と現在とでの仏壇や神棚の保有状況」を聞いたところ、下の図のような結果となった。

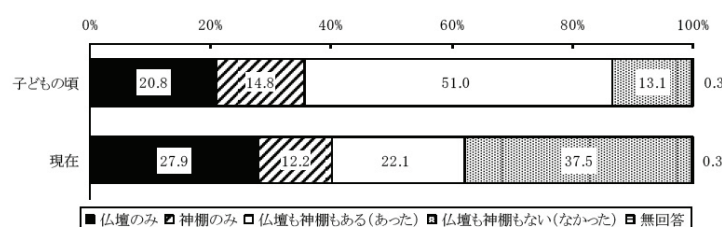


図6. 仏壇や神棚の保有状況

子供の頃では、「仏壇も神棚も両方あった」という回答が最多の51%で、「どちらもなかった」という回答は最も少ない13.1%である。だが現在では、最も多い割合を占めているのが「どちらもない」の37.5%である。次いで「仏壇のみ」が27.9%、「両方ある」が22.1%、「神棚のみ」が12.2%という結果であった。戦後60年の間に失われていった「家の宗教」の認識は、神棚や仏壇の消失とも結びついていると言える。

⁴ 「日常生活における宗教的行動と意識調査」 第一生命経済研究所 2006年6月

図6 出典：「日常生活における宗教的行動と意識調査」 第一生命経済研究所 2006年6月

2.1.2 葬式と仏教

昨今、寺院にまつわる話題で最も世間の目を集めたのは、大手スーパーイオンの葬式産業サービスへの参入と、それにとまなうお布施価格の目安を公表したことである。イオンのホームページでは、読経一式で25万円から、戒名のランクによって40万、55万、などと金額が明確に提示されている。また、直葬に対しては、10万という価格設定である。お布施の価格表の公表について、消費者からは賛同の声が、宗教界からは反発の声が上がった。

このような中、財団法人全日本仏教会によって、2010年9月13日に「葬儀は誰のために行うのか?～お布施をめぐる問題を考える～」と題したシンポジウムが行われた⁵。このシンポジウムでパネリストとして講演を行ったのは、慶応義塾大学商学部教授の中島隆信氏、大和総研主任研究院の石田佳宏氏、葬送ジャーナリストの碑文谷創氏、作家兼臨済宗僧侶の玄侑宗久氏、といった顔ぶれであった。各後援者が、全日本仏教会機関誌「全仏」11月号に、その総括を寄稿している。

その寄稿の中で、パネリストとして講演を行った慶応義塾大学商学部教授の中島隆信氏は、イオンのお布施価格表については「消費者ニーズのないところに新しいサービスは起こり得ない。この騒動の背後に、寺に対する檀信徒の長年にわたる不信感と徐々に進行しつつある国民の寺離れがあることは間違いないだろう。」とし、「葬儀の宗教性が薄れてサービス化」した結果、「型どおり経をあげてくれればお坊さんは誰でもいい、という遺族の声にイオンは答えただけである」と述べている。一方で、「そんな中での唯一の救いは、国民の寺離れは進んでいても、仏教離れまでには至っていないという点だ。」とも述べ、問題点を寺と檀家の関係の希薄化であるとの考えを明らかにしている。また、別紙の記事の中では、「寺檀関係が崩れると、今後50年間で7万6千の寺は1割未満の6千に減らざるをえない」⁶といったショッキングな予測を述べてもいる。

また、同シンポジウムで講演した大和総研主任研究院の石田佳宏氏は、「地方では寺院と檀家の繋がりが残っており、寺を支える意識もあるようだ。一方、都心においては、地方から都心へ移動した世帯の大半は寺院とは無縁であり、葬儀を行っても繋がりは希薄化している。」と分析した上で、「この問題の根本には無宗教世帯が増加して、寺院の活動を知らない世帯が増加していることに問題がある。葬式仏教と言われながら、世間は葬儀の意味やお布

⁵ 「全日本仏教会機関誌「全仏」11月号」より

⁶ 「AERA No.45 2010年10月11日」朝日新聞出版社発行より、p68. 特集「お寺はもういらぬ」内記事より一部引用

施の意味を正確に理解していないのである。」と述べている。そして、この問題の解決に向けては、「昔の寺院は地域コミュニティの中核であった。そして、地域教育としての幼稚園や保育園や学校などの公益事業を行っている寺院も多く、地元住民の連携の中核になれるチャンスは多いと思われる。地域教育や公教育において、寺院が担えることが増加している。政教分離のため、行政側から秋波を送ることは難しいから、寺院関係者自ら積極的な提案や活動が肝要であろう」と述べている。

葬送ジャーナリストの碑文谷創氏は、「今、地方寺院は都市化による地方の過疎化が一段と進んだために、寺院の財政的自立の危機に立たされている。自立できている寺院は3割もないのではないか。檀家に「寺を支える」という意識はあるものの、経済不況、おまけに中心層が高齢者となり寺院維持のための寄進は減少傾向にある。無住の寺をいくつも兼務している僧侶も少なくない。檀信徒にとっては「オラガ寺」であるから、寺の合併はままならない。」と見ている。そして、寺の課題として8つのことを挙げている。—①寺院の活動をもっと檀信徒や地域に見える、感じるようなものとする、②寺を住職だけのものから檀信徒の宗教共同体とする、③寺の会計の公開、④僧侶養成プログラムによる学習、⑤寺が責任をもって仏事を行う、⑥寺院の開放性を高めること、⑦寺と寺の協働、ひとつは地方と都市の寺の協働であり、ひとつは地方の寺同士の協働、⑧世襲制による弊害を見直すこと、である。

また、このシンポジウムの中では、宗教法人に対する課税についての話題もあがった。公益法人制度改革に伴い、宗教の公益性とは何か問われるようになったことに対する様々な議論である。また、この問題の背後には、活動の実体のない休眠法人が、転売されたり犯罪にや所得隠しに使われるケースがあった事件も関係している。現在、宗教法人は公益法人のひとつであるが、もしお布施が一律化され、檀家にむけたサービスの対価として看做されれば、それは宗教活動ではなく、収益事業であるとの指摘もあった。

イオンのお布施の目安公表の他にも、葬祭サービスの多様化は進む。僧侶派遣サービスの台頭も新たな展開のひとつである。朝日新聞で特集された「お坊さんも派遣の時代」(2009年7月31日朝刊)では、僧侶派遣サービスの展開が紹介されている。この記事の中では、埼玉県の僧侶派遣サービスの事例が取り上げられており、それによると現在首都圏を中心に霊園や葬儀会社との連携で月500軒あまりの派遣があるという。お布施も金額が明示されており、おおむね15～30万、そのうち最低でも8万が僧侶に入る仕組みだという。この派遣会社に登録している僧侶は、寺の檀家が少ないために派遣で生計を立てている僧侶や、檀家の減少に伴いお布施だけでは寺の管理に足りないという僧侶などで、僧侶派遣サービスは、現在の檀家制度では経営難に陥っている寺院の受け皿ともなっている様子が伺える。一方、国民側のニーズも大きい。特に首都圏では、高度成長期に地方から流入した世帯が、

地方の菩提寺とは縁が切れてしまい、葬儀の際に頼ることのできる寺院をもたないといったケースが多く発生しているという。お布施の金額は、地方によって、さらには各寺によって異なる。以前までは、檀信徒の中での慣習的に暗黙の目安があるなどしたが、菩提寺とも檀信徒とも関わりを持たない人々には、その金額設定は不透明きわまりないものである。そうした背景からか、国民生活センターにも、葬式関連サービスへの相談が年々増えているという。インターネットで「僧侶派遣」と検索すると、おぼうさんどつとこむ(<http://www.obohsan.com/>)、僧侶の派遣 寺院連盟「はちす会」(<http://hachisu-net.com/homon/>)、お坊さん総合派遣サイト(<http://www.emi-jp.com/obousan/>)など、さまざまな僧侶派遣サービスのサイトが出てくる。これらのホームページをみると、各種サービスに対して細かい料金設定が明示されている。安価で、明朗会計、そして丁寧なサービスが売りとなっている。

こうしたサービスの展開は、僧侶側にとっても国民側にとっても、需要があることは明らかである。しかし、前述の通り、寺院の公益性の問題を揺るがしかねないものでもある。問題は寺と檀家の関係性の変化、そして都市部への人口流入や生活構造の変化に伴う葬儀スタイルの多様化である。

前項、現代人の宗教意識の中でも触れたが、葬式の方法に対する意識にも変化が見られる(p22参照)。自分の葬式に関して、20～40歳代の多数が「無宗教の葬式にしてほしい」と回答し、埋葬方法に関しても「散骨」という選択肢を選ぶ人が増えたという結果である。

近年では、親族や近い人のみで執り行う「家族葬」、通夜や告別式などの儀式は行わず病院や自宅から直接火葬場で火葬する「直葬」、といった形式が増えたことに加え、生活保護を受けている人に対する低価格の葬儀サービスなども登場した⁷。中でも、NHKが2010年1月31日に放送した、NHKスペシャル「無縁社会 ～無縁死3万2千人の衝撃～」と題した特番では、誰にも知られずに亡くなり、引き取り手のないまま埋葬される「無縁死」が3万2千人にもものぼるという事実が報道された⁸。この放送で明らかになったことは、団塊の世代を中心に、故郷との“地縁”、家族との“血縁”、会社との“社縁”を失い、社会との接点を失ったまま亡くなる人が増えており、そうした実態に対応するサービスもまた急増しているといったことであった。

社会構造の変化による葬儀形式及び葬祭サービスの多様化と、寺檀関係の衰退は、宗教と現代人の関係性が希薄化していることを示している。

⁷ 葬儀社 富士の華ホームページ参照 (<http://fujinohana365.com/>)

⁸ 参考ホームページ: <http://www.nhk.or.jp/special/onair/100131.html>

2.2 社会史から見た都市と寺院

本項では、日本の都市の成り立ちを都市史及び社会史的側面から追い、その中で寺院がどのような役割を果たしてきたかを明らかにする。また、同時に寺院が人々の生活や地域社会とどう関わってきたのかを見てゆく。そして、現代都市における寺院のあり方として、新たな取り組みを行っている事例や、寺院の建物が都市空間の中でどう使われているかといった事例を紹介する。

2.2.1 都市の発展と社寺

—原始—

日本の都市の起源は、縄文時代の集落にさかのぼることが出来る。縄文時代の前期には、竪穴式住居が広場を囲み集落を形成していた。縄文中期には集落の規模が大きくなり、広場は集会や祭礼の空間として使用されていた。弥生時代には大陸から様々な文化が伝わるようになり、高床式住居と環濠集落ができるなど、住居とその集合形式にも発展が見られた。古墳時代には、倉庫や集会所、祭祀施設などが建設されるようになった。

—古代(飛鳥～奈良時代)—

都市規模での建設が計画的に行われるようになったのは、大陸からの建築技術を取り入れるようになった飛鳥時代の頃である。538年に仏教が公式に伝えられて以降、日本にも寺院が造営されるようになった。588年から609年にかけて、蘇我氏による飛鳥寺の造営が行われた。これが、飛鳥・藤原地における最初の国家的な大開発とされている¹。飛鳥寺は、中心軸状に主要建造物を配置した左右対称の構成で、回廊によって聖的空間が囲まれていた。だが、回廊の西側門から飛鳥川にかけての西方一帯には石が敷きつめられた広場がつくられ、公的な空間が存在した。故に飛鳥寺は都市的な空間構成をもった大建造物群であった。

以降、飛鳥周辺には天皇の宮が度々建設され、宮殿を核として、国家機構を構成する官衛や、広場、寺院などが立ち並ぶ都市を築きあげるようになった。奈良時代の平城京内には、大安寺、薬師寺、興福寺、元興寺の四大寺が順次藤原京から移築され、さらに東大寺、西大寺、法隆寺などの寺院が建設された。都市建設の初期に、既にその重要な要素として存在していた寺院だが、当時は中国で成立した七大伽藍という構成をとっていたとされる。これは、飛鳥寺、法隆寺、四天王寺、といったこの時代に造営された建造物群に共通してみられる伽

¹ 「図集 日本都市史」高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅(編), 東京大学出版会(発行), 1993、「総説 都市とは何か」p3, 参考

藍構成で、金堂・講堂・塔・食堂・鐘楼・経蔵・僧坊を建てることを基本とするものである。これに加え、例えば薬師寺伽藍には、浴室にあたる温室院、寺務所に相当する政治所院、正倉院、花の栽培のための花苑院、奴婢の住居である賤院などが建設されていた²。これらは非常に大規模な建造物群であったとともに、伽藍の内部に都市生活の一部が組み込まれていたことが伺える。



図1. 薬師寺伽藍

藤原京以降、都市計画には大陸の都市形成システムである条坊性が取り入れられ、直行する道路によって碁盤の目に区切られた都市が造られていった。また、律令性に基づく中央統治体制の拠点として、水陸交通の要所には地方行政都市である国府が建設された。国府には、政庁を核に、国司の館や工房などをふくむ官衛地域をつくり、その周囲に国分寺、国分尼路、惣社などの宗教施設が配置されていた。当時の国分寺及び国分尼寺は、その地域の最大の建築物であった。

飛鳥時代、奈良時代では、都市が形成される過程で国家プロジェクトとしての寺院の伽藍造営があった。

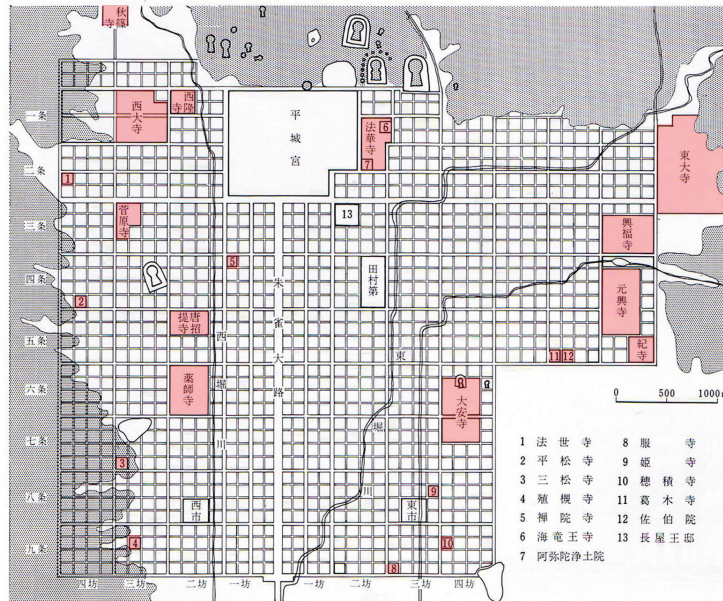


図2. 平城京内に造営された寺院 (※「日本建築史図集」²より引用した図に筆者が着色)

² 「日本建築史図集」日本建築学会(編), 彰国社(発行), 1963、図版解説p113-114、16-7薬師寺伽藍の構成を参考

図1 出典:「日本建築史図集」日本建築学会(編), 彰国社(発行), 1963、p16「薬師寺伽藍」より

図2 出典:「日本建築史図集」日本建築学会(編), 彰国社(発行), 1963、p30「平城京全図」より

—古代から中世へ(平安時代)—

平安時代には密教建築と浄土建築が伝来した。最澄による天台宗、空海による真言宗がひらかれ、各地に密教寺院が建設されていった。密教寺院は、旧来の伽藍構成をもつものではなく、多宝塔や礼堂といった新しい寺院形式を展開していった。また、その思想に基づき、より自然の中へ寺院が建設されていくようになった。自然に内包されることで、視覚的に聖域と俗世との境界が曖昧になっていった。

平安後期には真言宗の教えは貴族の人気を獲得し、極楽浄土を模した寺院が、貴族の別荘を兼ねるといって形で造営された。その最たるものが、藤原頼通による平等院である。また、奥州の平泉には、藤原清衡が長治2年(1105年)に中尊寺を造営する。この中尊寺にはじまる平泉の都市構成は浄土教信仰に根ざすものであった。

律令制が実態をなさなくなる10世紀以降は、民衆による都市生活空間の形成がみられるようになる。また京都では、10世紀末以降、京内でも禁じられていた寺院が数多く営まれるようになり、それを契機に寺院は都民信仰を獲得していった。11世紀後半から12世紀末にかけての院政期になると、京都の鴨東には法勝寺の造営を契機とした新都市「白河」が形成された。この都市も、整然とした地割りをもち街区で構成された。白河には後に院御所白河殿が造営された。

飛鳥・奈良時代には聖域であり、俗人がみだりに立ち入ることはできなかった寺院境内が、その様相や形態を変えつつあるのがこの時代である。

—中世(鎌倉、室町時代)—

鎌倉初期には、京の北の郊外と三条白河の辺りに延暦寺の里坊(人里にある山寺の僧の住居)が集まって寺院街を形成した。一方奈良でも、平城京の街区や道路が耕作地に変わっていく中、東大寺、興福寺、元興寺、春日大社などは変わらず繁栄していた。特に興福寺が鎌倉幕府から大和国守護職を委ねられたことで、かつての平城京は興福寺の支配拠点となっていた。このように、鎌倉時代には寺社が勢力をのびし土地を持つようになった。そうした大社寺の周辺地域には、11世紀から12世紀頃に「郷」と呼ばれた門前集落が発達した。これらは興福寺郷、東大寺郷などと呼ばれ、中世奈良の市街形成のもととなった。

また、鎌倉時代には禅宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などが成立し、これら新興仏教は庶民信仰を集めていった。これらの宗教は、中世を通して勢力を広げるとともに、各地に市街地を形成する要素ともなっていた。例えば、一向宗(浄土真宗)は北陸・近畿を中心に一向宗寺院を中心とする都市「寺内」を形成した。中世の有力寺院は、公家、武家にまぎって権力を

拡大し、寺院の伽藍周辺や門前に、寺院に関わる人々だけでなく、商工業者の在家なども住まわせ、ひとつの都市圏を形成していったのである。

こうした諸都市を結ぶ交通網が発達すると、定期的な市が開催されるようになる。この市の開催地は、河原、空き地、境界の地、寺社境内やその門前などであった。下の(図3)は、備前国の西大寺の境内で市が開催されたことを記したものである。この図によると、市場には酒屋、魚座、餅座、鋳物座などで構成されていた。

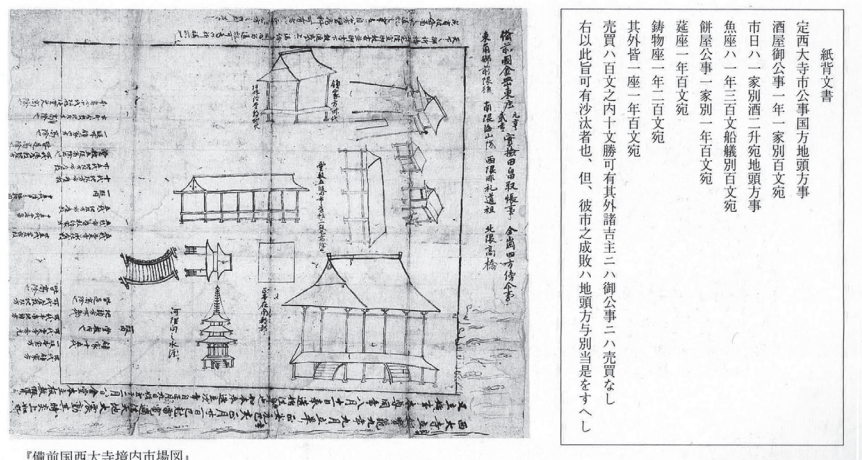


図3.「備前国西大寺境内市場図」(1322)

一方、百姓らによる、惣とよばれる自治集団も出現した。村落共同体とも言える自治組織である惣は、土地の所有や年貢の請負などを自治的に行うことができた。惣は15世紀、16世紀とその力を強め、農民による自立組織として機能するようになっていくが、その集団の公的施設として時に寺社が存在した。集会等が行われる施設を惣堂と呼ぶが、これはしばしば仏堂形式のものであった。このように、仏堂が集会に使われるということもあった。右の(図4)は、惣堂として使用されていた延命寺の薬師寺堂である。惣堂は基本的に一室空間で、仏壇の横や後方に宿泊のための部屋や囲炉裏がある。

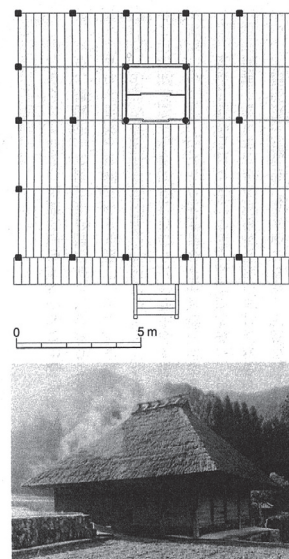


図4. 延命寺薬師堂平面図(上)と外観(下)

図3 出典:「図集 日本都市史」(前掲)p81

図4 出典:「シリーズ都市・建築・歴史 3 中世的空間と儀礼」東京大学出版会(発行),2006より、3章第四節「惣堂・村堂」黒田龍二(著)p253

また、猿楽などの芸能が演じられた場所も、主に寺社の境内であった。

中世においては、仏教は民衆の信仰の対象となるとともに、各地で勢力を伸ばし領主となることで、爆発的に広がって行った。有力寺院が勢力を拡大し、その境内や門前に市街地を形成する一方で、寺院の本堂が惣や職能集団の集会場所として利用されたり、寺院境内で市が開かれたりと、寺院と人々の生活が密接していたことがわかる。

—中世から近世へ(戦国、安土桃山時代)—

16世紀後半、各地で戦国大名による諸国の領地化がすすむと、寺社勢力はその対抗勢力として破壊の対象となった。豊臣政権は寺社を非武装化することに成功し、それ以降、寺社建築は戦国大名をパトロンとして造営されていくようになった。

豊臣秀吉による京都の都市改造の際には、寺院の再編成が行われ、その結果、寺町が形成された。寺町は京都市中をとりまくように配置され、洛中の防衛線の役割も担うことになった。また、寺をまとめることで、市民と宗教の物理的な距離をつくろうとした意図があった。各寺院は中世に形成していた市街地としての境内や寺内地域は解体され、新たな街割りに組み込まれて行った。そして寺院は純粋な寺院境内のみを持つようになった。こうして、寺院は支配権を失い統治システムのもとにおかれるようになった。全国各地に城下町がつけられたのもこの時期であり、その際にやはり寺院は寺町を形成し、都市の周辺部に置かれている。

こうした経緯を経て、寺院とった財源確保の策はご開帳であった。普段は見ることの出来ない仏像や宝物を公開し、拝観できるようにする。これに併せて境内に縁日や興行(猿楽や平家琵琶、曲舞など)を許可し、参加者・見物客からの収益を見込むのである。堂塔の修繕費や寺院自体の収入を得る目的で頻繁に勧進やご開帳が行われるようになり、境内空間はより人々に開かれていった。はじめは参加、見物は専ら、貴族、武士などが中心で庶民の参加は付加的なものであったが、江戸時代には、庶民の娯楽として成長していった。

中世から近世にかけては、寺町の形成を契機として、寺院と都市の関係が一変する。それまでは市街地や都市の中核要素であった寺院は、戦国大名の統治制度のもとで都市要素のひとつとして再編成された。権力を失った寺院は、市場の開催にはじまり、商業性、娯楽性、世俗性を帯びはじめた。

—近世(江戸時代)—

江戸時代の寺社境内は、商業空間としての一面をもっていた。境内が都市の広場としての役割を果たすようになったのである。それには、当時の寺社境内は幕府の統治下にあったとはいえ、一種の治外法権的な特権の下にあったことが大きく関係している。江戸時代には、寺院の勧進の対象は一般庶民となり、そのための娯楽空間が付帯するようになった。

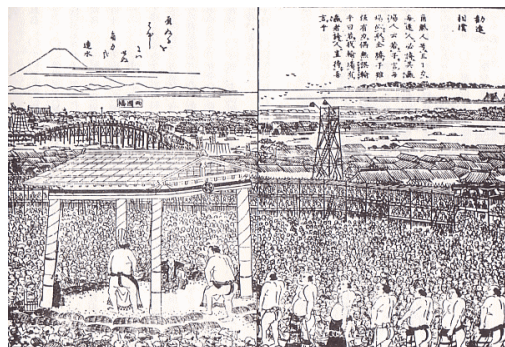


図5.「東都歳時記 回向院勧進相撲」長谷川雪旦筆より

勧進のためのご開帳にともない、縁日や相撲などが開催され、境内や参道沿いには見世物小屋、掛茶屋、などが集中した。また、その治外法権ゆえに、境内では賭博も行うことが出来た³。その様子が描かれたのが、(図5)(図6)である。(図5)では、回向院での勧進相撲に押し掛ける大衆が描かれている。回向院では勧進の目的で始まった相撲だが、やがて春秋二回の興行が開かれるようになり、明治四十二年に旧両国国技館が完成するまでの七十六年間、境内で相撲が開催され続けた。こうして一般庶民の娯楽空間となった寺院は、伽藍やその境内が都市の名所として絵画に描かれるようにもなった。

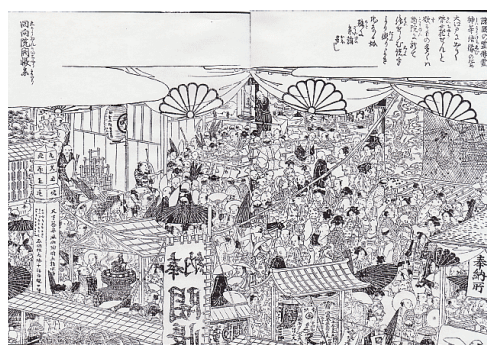


図6.「江戸名所図会」長谷川雪旦筆より
大規模な賭博が開催された回向院のご開帳

そうした絵画文化の発展と共に、寺院の参詣ネットワークが形成され、境内は物見遊山、行楽の場としても栄えるようになった。(図7)には、芝の増上寺に参詣にやってきた旅姿の人々が描かれている。



図7.「江戸名所百景」歌川広重筆より
芝神明増上寺

³「都市と娯楽」加藤秀俊(著), 鹿島研究所出版会((発行), 1969、p28

都市近郊の寺社などではこうした興行や観光に力を入れることで巨額の賽銭収入を得ることができたという。また、現在の宝くじに相当する「富籤」「富突」の開催が行われたり、「頼母子講」による民間資金の運用なども行われた。また、本堂周辺の遊興地を貸し付けたり、子院を宅地化し店賃をとるなどのことも積極的に行われた。こうして寺院は、遊興地化するとともに金融システムの役割や都市開発の一端を担うようになっていった⁴。

また、寺院は幕府の統治システムとしての役割も果たすようになった。島原の乱を契機として、キリスト教の弾圧と宗教統制のための「寺請け制度」が発足し、すべての民衆は寺社の檀家となることを要求された。これにより、全国各地に展開する一般的な寺—末寺は経済基盤を獲得することとなる。この時の寺社と民衆の関係は、必ずしも信仰に基づいたものではなかったが、これが寺社境内が人々の生活にとって非常に身近な場所となる契機となった。出生、結婚、葬儀といった出来事に寺院が関与することで、寺院境内は公共的な機能を担う空間となっていったのである。こうした性格を持つことにより、教育や医療の場としての寺社も現われるようになった。

こうした変化にともない、寺社建築も変容をとげた。一つは装飾性を増したこと。二つめは技術の進歩によって高さが増したこと。そして三つめが、建物の開放性が増したことである。特に、本堂全面の外陣や向拝部分が、大勢の参詣者に対応するために広く開かれるようになった。また、四つめに、様々な公的機能を備えるようになったため、仏具を飾る内陣・様々な用途に使用できる外陣・そして台所や住居を備えた庫裏、という構成が17世紀から18世紀にかけて成立していった。

また、江戸では初期に寺町が形成されたが、江戸の都市成長とともに順次外周部に転移していった。特に、明暦の大火の後には当時の市街地の周縁部に寺が配置された。境内が火除け地の役割も果たしたのであった。こうした寺院の転移にともない、寺院周辺の門前町が連続して町人地となるなど、江戸において寺院は都市の構造と発展に関係して配置された。

江戸時代には、寺社と民衆の関係が接近した。また、境内が都市の娯楽空間としての機能を帯びて世俗化する一方で、寺院自身が公共機能の一部を担うようにもなった。

⁴「シリーズ都市・建築・歴史 6 都市文化の成熟」鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人(編), 東京大学出版会(発行), 2006より、三章「近世寺社境内の様相」光井渉(著)参考、p178

— 近代以降(明治、大正、昭和時代)—

有名な寺院は都市のアミューズメントスペースとしての機能を保ち続けたが、神仏分離、廃仏毀釈によって神社境内内の仏教空間は取り除かれていった。これにより、神仏が混交して形成されていた境内空間は大きく変化した。また、境内の非宗教空間は官有地化され、遊興空間の多くが消失した。また、寺社がになってきた教育や医療といった公共的機能は、学校や病院の設立によって失われ、寺院が担ってきた様々な機能は切り離されていった。一般的な末寺は、後ろ盾を失いながらも近世に築かれた檀家制度のもとに経営していくこととなり、本山などの大規模寺院や有名寺院は観光地化を進めるようになる。

また、僧侶の結婚、世襲が一般化したため、本堂、庫裏に付随して境内に住宅が建てられるようになり、境内の広場的、公共的性格は消え、寺院の都市に対する開放性は弱まっていく。その一方で、幼稚園を経営する仏教団体が登場したり、境内の一部を有料駐車場化したり、といった多角経営の道を歩む寺院もある。

近代から現代では、寺院の存在意義をゆるがす社会構造の改革が行われた。それにより、末寺のほとんどは檀家制度によって成立する菩提寺として、大規模な寺院や本山は観光地としての寺院のあり方を強めていき、宗教的な影響力は失われつつある。近代では家制度や地域社会の伝統と共に存続した檀家制度であったが、そうした基盤は弱体化しつつある現在、寺院は新たな存続の道を模索している状態だと言える。

2.2.2 現代都市における寺院の試み

檀家制度を経済基盤として小規模に展開する現代の仏教寺院であるが、時代に即した形で都市や生活と新たな関係を築こうとしている寺院も多くある。どのような目的で、どのような活動がなされているのか、その事例を収集した。

その結果、宗教的活動以外で非常によく行われている試みは、エンターテインメントに関するものであった。本堂をコンサート会場として提供する、本堂で映画上映会を行う、演劇や寄席を行う、といった類いのイベントである。また、本堂や境内の一部で飲食サービスを行っている事例もいくつか存在した。他にはユースホステルを経営する、幼稚園や保育園の運営を行う、敷地の一部を駐車場として貸し出す、等がみられた。また、境内の一部が近隣公園となっている例も、住宅地などではよく見かけられる光景である。こうした様子は、いずれも前述した江戸時代での寺社のあり方を連想させる。

以下に、主な事例を紹介する。

事例1. イベント空間としての活用

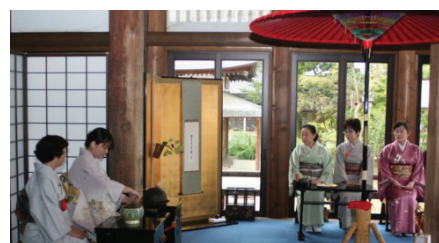
a. 浄興寺—NEO浄興寺プロジェクト

所在地：新潟県上越市寺町2丁目6-45 浄興寺

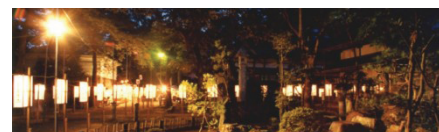
NEO浄興寺プロジェクトとは、お寺本来のコミュニケーション機能を再発掘し、発信型の観光拠点としようという取り組みである。浄興寺の本堂では、ジャズ、クラシック、チャリティーコンサート、寺子屋（郷土史など）、能、狂言、茶会など様々なイベントが行われている。



ジャズライブの様子
写真出典：http://blog.livedoor.jp/johkohji_event/archives/2006-06.html



茶会の様子
写真出典：http://livedoor.blogimg.jp/johkohji_event/imgs/0/3/03737081.jpg



8月に開催される灯籠会
写真出典：http://livedoor.blogimg.jp/johkohji_event/imgs/8/3/83452b5b.jpg

情報源：
<http://www.neo-njp.com/> (公式ホームページ)
http://blog.livedoor.jp/johkohji_event/ (浄興寺イベントレポートブログ)

b. 一心寺シアター倶楽

所在地：大阪市天王寺区逢阪2丁目8-69 一心寺

一心寺境内に新築した三千佛堂の地下に設けられた、多目的劇場。演劇、落語、コンサートなどが行われている。また、同境内の南回所は、商業的ではない利用に限り、コンサート・展示、展覧会・講演会・研究会、などへのスペース貸し出しを行っている。



一心寺シアターの外観
写真出典：http://image.corich.jp/stage/img_theater/l/theater328_1.jpg?1294580587



劇場内の様子
写真出典：<http://livedoor.blogimg.jp/theaterkura/imgs/9/c/9c6c4e83.jpg>



南回所の利用の様子
写真出典：http://www.isshinji.or.jp/images_event/minamikaisyo_a.jpg

情報源：

<http://www.officebl.net/kura/home.htm> (公式ホームページ)
http://www.isshinji.or.jp/event_minami.html (一心寺ホームページ内、南回所)

c. お寺DEワールドカップ

開催地：山形県米沢市中央5-4-7 西蓮寺

2010年に開催されたワールドカップをお寺の本堂でみるイベント。入場制限は150から200名であった。主催はお寺DEワールドカップ・パブリックビューイング実行委員会による。



本堂に設置されたスクリーンで中継をみる
写真出典：<http://www.buddhachannel.tv/portail/local/cache-vignettes/L423xH309/21-3-d762d.gif>

情報源：

<http://www.ne.jp/asahi/lovefootballtemple/lfbtemple/tera/>
(お寺DEワールドカップ・パブリックビューイング実行委員会)

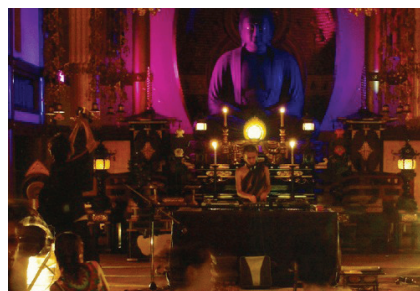
d. 誓願寺タブーナイト

開催地：京都市中京区新京極桜之町453 誓願寺

演劇、プロデューサーなどをやっていた僧侶が企画した、お寺の本堂での倶楽部イベントである。その他にも法話演劇、寄席などの様々なイベントが企画されている。



誓願寺の外観、寄席の看板がみえる
写真出典：http://www.higan.net/blog/bouzu/images/kojima_01.jpg



本堂で行われたクラブイベントの様子
写真出典：http://www.higan.net/blog/bouzu/images/bouzu_title_kojima_2.jpg

情報源：

<http://www.fukakusa.or.jp/> (誓願寺ホームページ)

<http://www4.ocn.ne.jp/~pichiku/> (定例 ピーチク寄席)

http://www.higan.net/blog/bouzu/sect/jodo/kojima_1/ (僧侶インタビュー)

e. 光明寺 「誰そ彼」

開催地：東京都港区虎ノ門3-25-1 光明寺

お寺本堂でのライブと法話を組み合わせた定期的なイベントである。「お寺の音楽会誰そ彼(たそがれ)は、音楽好きの僧侶と僧侶ではない音楽好き達が開催しているライブイベント。お寺の音楽会「本堂で音楽を聴いてみよう」という軽い気持ちから始まった、言わば"お坊さんのホームパーティー"です。」(公式ホームページより)



イベントの様子
写真出典：http://www.taso.jp/DTR_LIVE.html



法話も行われる
写真出典：http://www.taso.jp/14_03.html

情報源：

<http://www.taso.jp/> (公式ホームページ)

f. お寺と温泉ライブ in 伊東温泉「あじさいさい」
開催地：静岡県伊東市新井2丁目13-1 宝専寺

宝専寺境内で開催されるライブイベントで、前掲の誰そ彼の関連イベントである。宝専寺ライブ実行委員会により主催されている。ライブと法話の組み合わせで、地域に根ざしたお寺、観光のきっかけ、を主旨とする。



イベントの様子
写真出典：http://www.higan.net/blog/housenji_live/images/DSC01425.jpg



イベントの様子
写真出典：http://www.higan.net/blog/housenji_live/images/DSC01429.jpg

情報源：
http://www.higan.net/blog/housenji_live/ (宝専寺ホームページ内イベント情報)

g. 本願寺LIVE 他力本願でいこう！
開催地：東京都中央区築地3-15-1 築地本願寺
主催／事務局：浄土真宗本願寺派 本願寺宗務首都圏センター

毎年開催される、築地本願寺のイベント。お笑い、ミュージックイベント、社会貢献団体の展示・ワークショップ、足湯、キャンドルイベント、境内カフェ、フリーマーケット、仏教僧団、法話など様々な催しが境内にて行われる。



ライブの様子
写真出典：<http://magazine.moonlinx.jp/headline/3b.jpg>



境内の様子
写真出典：http://i.listen.jp/st/sp/sp/summerfes2010/img/saids017_1.jpg

情報源：
<http://hongwanji-shutoken.net/tariki/> (イベントホームページ)

事例2. 地域に境内を開放する

h. 神谷町オープンテラス

所在地：東京都港区虎ノ門3-25-1 光明寺

主催：光明寺仏教青年会

地域や都市との関係性を新たに構築しようとする試みの一つとして、東京都神谷町にある光明寺の「神谷町オープンテラス」について取材を行った。

—概要—

浄土真宗本願寺派梅上山光明寺の境内に設けられた飲食及び休憩スペースである。誰でも利用出来、春期から秋期までは平日の昼間に週2回程スタッフによりお茶とお菓子がふるまわれる。特に近隣で働く人々の利用が多い。

—サービス—

希望者はスタッフによるおもてなしを無償で受けられる(淹れ立てのコーヒー、お茶、お坊さん手作りの和菓子など)。オープンテラスはお寺の境内にあり、そこで行われる活動は一時的なカフェの営業(お金を媒介に物やサービスを交換する)ではなく、お寺が長い伝統の中で培ってきた「おもてなし」の精神を現代に即した形で表したものと看做すためである。その代わりに、帰りにご本尊に向かい、感謝の気持ちを込めて合掌(焼香)をすることが推奨されている。

—空間構成—

本堂の2階部分の庇空間に、椅子とテーブル、ベンチやソファが並んでいる。テラス席からは墓所、森林、東京タワーを望むことができる。オープンテラス開放時にも仏事が執り行われることがあり、その際には静粛を促す張り紙が出される等の工夫がある。



光明寺の前景



オープンテラスの様子

※写真はすべて筆者撮影

— 設立の背景 —

自由に使える休憩スペースの設立背景には、都会の真ん中で、まちの風景の一つとなっているお寺を、この地域に暮らす人々、働く人々にもっと親しんでもらえるように、という発想がある。誰でも気軽に手を合わせることができる場をお寺が提供することで、都心で働く人々の忙しい日常に、忘れかけていた「感謝」の気持ちを添えることができればという願いが込められている。また、お寺の本堂の前に広がるこのテラスをお寺が占有するより、地域(神谷町)の人々に開かれた空間(オープンスペース)とし、地域の共有財産として捉え直していきたいと考えてのことである。



オープンテラスからの眺め (写真は筆者撮影)

— 利用の実態 —

昼の時間帯には、常時5～10人程の利用客がいる。大半が飲食物を持参し、そこで休憩がてら昼食をとっている。一人で訪れる女性が最も多く、次いで女性の二人連れ、男性の利用者、という割合であった。昼休みを過ぎると、休憩に訪れる人が増える。パソコンを持ち込んで仕事をしている人も数名いる。

おもてなしサービスの利用客も毎回満席(一日3回)。子連れ夫婦、高齢者同士、墓参りに来た檀家、OL同士、と様々な層が利用。ほとんどの利用者が常連である様子が見受けられ、混み合っているときは自分たちで椅子を出したり配置のアレンジを行う等して利用していた。また、散歩中に訪れたと見られる中高年層も数名いた。

オープンテラスからの風景は1/3が境内の墓所、1/3が森林、1/3が空(と東京タワー)というものであるが、眺めのよいテラス席は人気で、常に相席で利用されている。墓所を眺めていても不快でないどころか、非常に心地よい雰囲気を感じられた。

取材協力:
木原祐健氏(神谷町オープンテラス店長、浄土真宗本願寺派僧侶)

情報源:
<http://www.komyo.net/kot/>(神谷町オープンテラスホームページ)

事例3. 宿泊施設としての活用

もともと寺院には、修行中の僧侶をはじめ、参詣者への宿泊サービスとしての宿坊を備えていた。そのため、現在でも宿泊サービスを行っている寺院は多い。

i. 太江寺ユースホステル

所在地：三重県度会郡二見町江1659 太江寺

収容人数：28人

宿泊費：2310円

1200年前に行基が開いたと伝えられる真言宗の古寺である。寺の庫裡がユースホステルとなっている。

情報源：

<http://www.jyh.or.jp/yhguide/toukai/taikouji/index.html> (全国ユースホステルマップ 東海地方版)



庫裏入り口

写真出典：http://zitensyanikki.secsaa.net/upload/detail/image/UNI_0799_400.jpg.html

j. 千光寺ユースホステル

所在地：奈良県生駒郡平群町鳴川188 千光寺

収容人数：30人

宿泊費：2993円

千光寺の元宿坊であった建物がユースホステルになっている。土日には座禅や写経も体験することが出来る。毎月第2日曜日には吹螺講習会も開催されている。



宿坊入り口

写真出典：http://syukubo.com/photo/17_nara/sen-kozi02.jpg

情報源：

<http://syukubo.com/spot/05kinki/naraken005.html> (宿坊研究会ホームページ)



宿坊入り口

写真出典：http://syukubo.com/photo/17_nara/sen-kozi03.jpg

以上、現代都市において、寺院の展開する新たな取り組みについての事例を概観した。

その結果、江戸時代からの遊興的性格を受け継いでか、エンターテインメント空間として地域社会と関係するという事例が数多くあった。その中でも、宗教以外の活動として音楽や芸能イベントを主催しているもの、イベント空間として本堂や境内を貸し出しているだけのもの、宗教活動との連携でイベントを行っているもの、など、そのスタンスは様々であった。ライブと法話を組み合わせたイベントが積極的に行われている事例からは、現代人に対しての布教活動の模索が伺える。

事例2としてとりあげた神谷町オープンテラスでは、境内を公共空間として開放しており、自ら積極的に地域社会や都市の機能を担おうという姿勢がみられたことは興味深い。檀家との関係だけではなく地域社会と関係していこうという姿勢と、近隣で働く人や地域住民のニーズがみごとにマッチしている例だと言える。人々がお寺に足を運ぶ理由に、宗教以外の用途が加わるという、今後の寺院のあり方として多いに参考になる事例であった。

また、本項ではとりあげなかったが、境内の一部が近隣公園となっている例も、住宅地などではよく見かけられる光景である。また、幼稚園や教育機関などの経営を行っている寺院、宗教団体も数多く存在する。

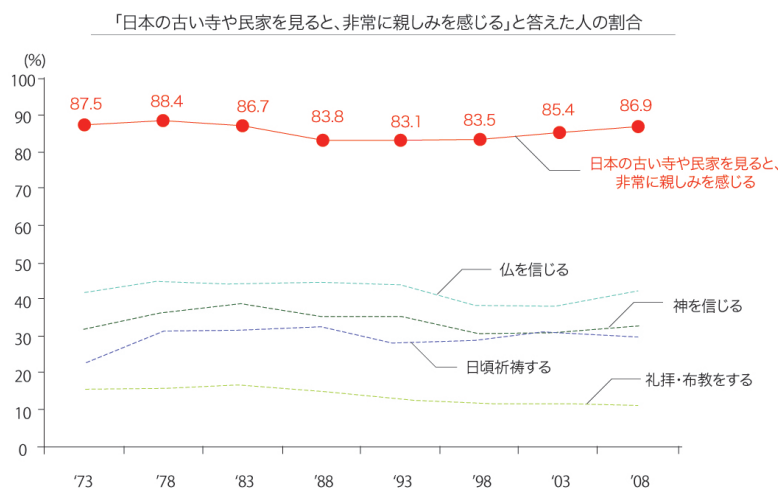
2.3 景観的観点からみた寺院

本項では、景観の中で、寺院がどのように認識されているかを明らかにし、寺院のもつ景観的価値について記述する。

2.3.1 原風景としてのお寺

下のグラフは、NHK放送文化研究所が行ったナショナリズムに関する意識調査の結果である。「日本の古い寺や民家を見ると、非常に親しみを感じるか、そうでないか」という質問に対しては、信仰や宗教心に関係なく常に8割以上の人々が「親しみを感じる」と回答している。また、そのように感じる人の割合は時代を経ても変わっていない。

この意識調査からは、日本人にとって寺院は宗教施設としてではなく、伝統的な風景のひとつとしての認識の方が高いことがわかる。それには、寺院はどこにでもある風景として、その遍在性の高さが、原風景としてのイメージ形成に関係していると考えられる。



(NHK放送文化研究所「日本人の意識・2008」、問34・ナショナリズムに関する質問より、筆者が作成)

図1. 寺のある風景への親しみ



図2. 寺院のある風景(新潟県長岡市)

図1 「日本人の意識 2008」NHK放送文化研究所 2008年6月実施

2.3.2 絵画の中の寺院

江戸時代には、寺院は都市の名所として多くの絵画の中に描かれた。例えば、天保5年(1834年)に出版された「江戸名所図会」は、江戸とその近郊の街についての地誌紀行であるが、そこには1,043ヵ所の神社・仏閣・名所古跡についての紹介と共に、長谷川雪旦によって描かれた詳細な挿絵754点が載せられている。また、歌川広重による「名所江戸百景」(安政3年(1856年)から同5年(1858年)に制作)の中にも、寺院が描かれたものが何点かある。本項では、絵画に描かれる寺院から、寺院のつくりだす景観構成について記述する。

まず、「江戸名所図会」(長谷川雪旦筆)である。

右の、図3は上野の寛永寺の境内を描いたものの一部である。大規模な本堂の周囲に、子院などが立ち並び、境内には樹木が整然と、しかし建物を取り囲むように豊富に植えられている。また、多くの参拝客も描かれている。江戸時代に、遊興地として栄えた寺院は、大規模な境内、伽藍配置であったことはもちろん、豊かな境内林を有していたことがわかる。

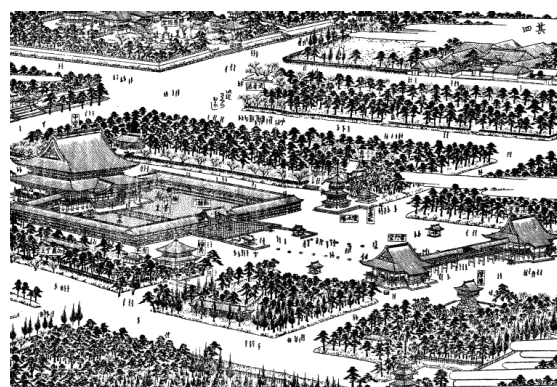


図3. 東叡山寛永寺
「江戸名所図会」巻之五

寛永寺のような都市の中での一大観光スポットが描かれる一方で、図4から図6のように、江戸の郊外、近郊地域についても多くの寺院が描かれている。

図4は本所の弥勒寺(墨田区立川)を描いたものである。この絵からは、この地域は整然とした地割りであることがわかる。周囲に家屋敷が立ち並ぶ中、寺院本堂の大屋根が周囲に連なる屋根の形と異なることから、これが寺院であることがわかる。特に山門から本堂へのびる参道と、その周囲の広大なオープンスペースが寺院境内であることを特徴づけている。山門は道路から少し奥に設置されており、道と山門の間に溜まりのような空間が出来ている。

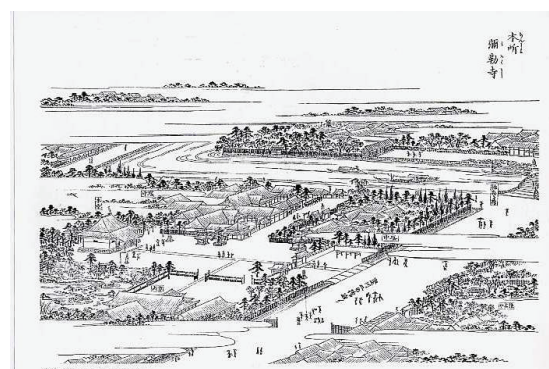


図4. 本所 弥勒寺
「江戸名所図会」巻之七

図5は、平林寺大門(埼玉県新座市野火止)を描いたものである。この図において興味深い点は、参道とその両側の林が遠近法によって描かれているのみであることだ。袈裟をまとった僧侶や参拝客も描かれているが、消失点の先には何も無い。

この、奥性を強調する景観は、寺院のつくり出す景観的特徴のひとつであると言える。2章でも述べた通り、林(=自然)の中へと拡散し視覚的に境界が曖昧になるという伽藍の構成は、中世の頃から見られた。見えない奥を演出する景観構成と共に、参道が広大なオープンスペースになっていることも読み取れる。

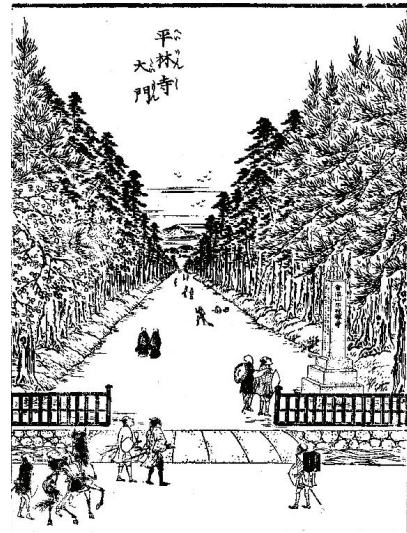


図5. 平林寺 大門
「江戸名所図会」巻之四

図6は、赤羽の静勝寺を描いたものである。この絵には、山の中に立地する寺院と、その足下に農村集落の一部が描かれている。伽藍の構成は、本堂、庫裏、観音堂、影堂、山門という構成で、それほど大きい規模ではない。寺院境内は山の林に囲まれており、曹洞宗の寺院に典型的な立地と構成であると言える。やはり境内には広いオープンスペースがあり、境内が山の中にあることで奥性が演出されている。



図6. 赤羽
「江戸名所図会」巻之五

本論文で扱う菩提寺の多くは、これと同程度か、これより小規模な寺院であるが、こうした寺院も名所として描かれている点は興味深い。絵の中には、「懸雲灯 円通閣 灌公祠 梵鯨楼 古城坳 楼臺壕 靈亀池 蟠松岡。右、当寺の八勝なり」と書かれている。

図版出典:

- 図3、図6 「新訂 江戸名所図会 <五>」 斎藤幸雄、他(著) 市古 夏生・鈴木 健一(校訂), 筑摩書房, 2009
 図4 「新訂 江戸名所図会 <六>」 斎藤幸雄、他(著) 市古 夏生・鈴木 健一(校訂), 筑摩書房, 2009
 図5 「新訂 江戸名所図会 <四>」 斎藤幸雄、他(著) 市古 夏生・鈴木 健一(校訂), 筑摩書房, 2009

次に、「名所江戸百景」(歌川広重筆)である。

図7「増上寺塔赤羽」では赤羽川(古川)に架かる赤羽根橋と芝の増上寺を描いたものである。境内の南に建てられていた五重塔が絵の右部分に描かれ、そこから西南の方向を俯瞰した図である。

この絵の中では、都市を俯瞰することのできる場所として五重塔と、左端に物見櫓が描かれている。低い街並から見れば、このように高くそびえ立つ建造物はランドマークであったことが伺える。また境内の緑も豊かである。



図7. 名所江戸百景「増上寺塔赤羽」

図8は「鋧炮洲築地門跡」である。築地門跡とは、築地本願寺のことである。門跡とは格式の高い寺院をさす寺格のひとつであり、当時の築地門跡は、敷地に50を超える分院を擁する大寺院だったという。

絵の構成は、海上から陸を眺めており、民家(明石町)の並ぶ向こう築地門跡本堂の大屋根が描かれている。ここでは大屋根はランドマークである。



図8. 名所江戸百景「鋧炮洲築地門跡」

これと同じ景観を描いたものが、「江戸名所図会」の中にも存在する。それが、図9「寒橋」である。この絵では、一番手前に海、そして明石町の民家、その向こう(絵の中央右)に寒橋が描かれている。そして、遠方には築地門跡の大屋根が見えている。

このような描かれ方からは、寺院の大屋根は寺院の象徴であり、また都市景観の中でランドマークの役割を果たしていたと考えられる。

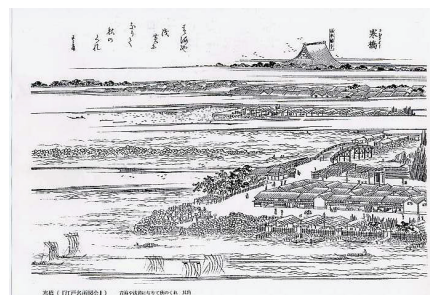


図9. 江戸名所図絵「寒橋」

図版出典

図7 http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/dd/100_views_edo_049.jpg

図8 http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/1/19/100_views_edo_078.jpg/390px-100_views_edo_078.jpg

図9 「新訂 江戸名所図会 <一>」 斎藤幸雄、他(著) 市古 夏生・鈴木 健一(校訂), 筑摩書房, 2009

絵画の中に描かれた寺院の景観の特徴は、次のようなものであった。

1. 寺院の大屋根は、ランドマークであり、寺院の象徴でもある。
2. 境内のオープンスペースと、参道によってつくり出される奥行きが、周囲の街並と比較して特徴的である。
3. 境内林などに象徴されるように、都市部でも郊外でも境内の自然要素は豊富である。自然の中に内包されているような構成をとっているためであると考えられる。

絵画に描かれる寺院の景観からは、大屋根・奥行き・境内林などの樹木、の3つが寺院の景観の主な要素であると考えられる。また、こうした景観が様々な絵画の中に描かれていることは、寺院を含む景観が古くから庶民に親しまれてきたことの裏付けとなる。

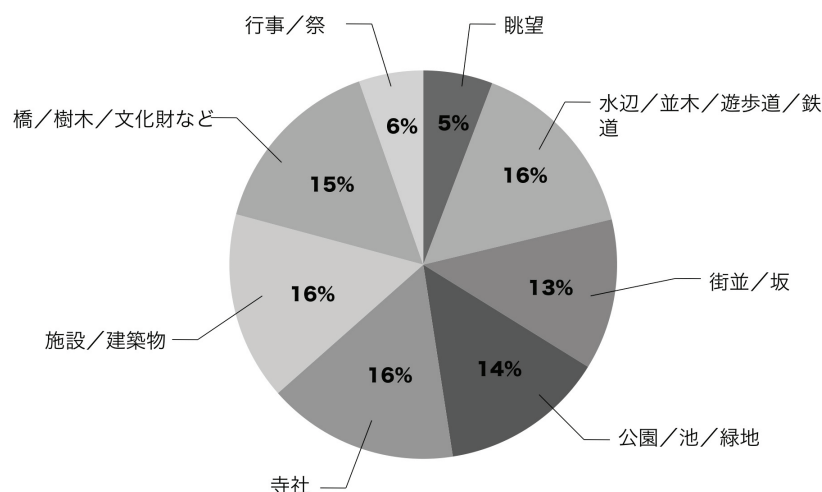
2.3.3 景観百選に選定される“寺のある景観“

現代においても、寺院のある景観は名所として認識されることが多い。そこで、景観事業の中で「寺のある風景」はどのように扱われているかを知るために、以下に既往研究を引用する。

自治体で行われている景観百選に注目し、選出された景観についての分析を行った既往研究に、「地域認識としての景観特性に関する研究—東京都内景観百選を対象にして—」(宮下真紀子, 2006年)がある。この中の、第3章、景観百選事業の傾向では、東京都23区内で行われた14事業1114件を、どのようなタイプか分類し統計をとっている。それによると、景観事業で選出されている景観は、「眺めを選定した「眺望」、連続的に存在する場所として「水辺／並木／遊歩道／鉄道」、多様な場の景観を経験すると考えられる「街並／坂」、明確な境界線をもち閉ざされた領域を形成する「公園／池／緑地」、境界線とともに歴史的意味も強く持つ「寺社」、ランドマークとなり人が集まる場所として「施設／建築物」、点的、物的な選定である「橋／樹木／文化財など」、「行事」の8項目」であるという。

この分類において、寺のある風景が「寺社」として一つの景観のタイプに分類されている点は注目する点である。これらの項目の選定割合をみると、「寺社」が選定される割合は16%と、全体的に見ても高い方であり、「寺のある風景」は今も名所として認識されることがあるということを示している。

「23区で行われた景観事業、大分類8項目の内訳」



「地域認識としての景観特性に関する研究—東京都内景観百選を対象にして」(宮下真紀子, 2006)より作成

図1. 景観事業で選定された景観—大分類

さらにこの8項目を細かく分類し集計したものが、(図2)である。ここでは、「寺社」意外の項目の中にも、寺と関連明日景観が挙げられている。また、2つの項目にまたがって選定された、組み合わせの景観を分類したものが(図3)である。これを見ると、寺と樹木、寺と門などの組み合わせで選定される景観があることもわかる。

景観事業で選定された景観一小分類

眺望	水辺・並木・遊歩道・鉄道	街並み・坂	公園・池・緑地	施設・建築物	橋・樹木・文化財など	
川から・川越し	28 中小河川沿い	41 商店街	28 中・小公園	61 公共施設	99 橋	65
陸橋から・線路	14 大きな並木	34 駅・役所周辺	27 大公園	59 古い建築物	46 樹木	33
河岸	13 小さな並木	30 街道筋	17 緑地・雑木林	50 駅	33 その他	30
街中から	10 大河川沿い	32 その他	15 庭園	20 学校	31 門	27
外部要素を	9 川沿いの並木	21 小坂	15 池	18 その他	25 地蔵・石仏・観音像	18
高台から	9 濠	17 産業	14 植物園・生産緑地	10 土木施設	16 塚	19
建物から	4 河岸	15 住宅街面	10 島	4 産業施設	7 その他の文化財	13
緑地	5 線路・鉄道	15 市場	9 その他	3 総計	257 墓	11
その他	3 観水公園	12 田畑	8 総計	225 行事・祭	塙・壁	10
総計	95 船だまり	10 団地	8 寺社	9 寺社の祭り	39 動植物	9
	緑道	10 大坂	8 寺	140 地域祭り	24 遺跡	7
	車両庫	7 寺周辺	8 神社	111 その他	9 湧水・井戸	6
	遊歩道	7 幹線道	9 教会	7 市場	7 水門	5
	その他	2 ビル街	13 その他	3 花火大会	5 総計	253
	総計	253 寺坂	5 総計	261 スポーツ	4	
		辻・交差点	4	総計	88	
		寺町	4			
		住宅街通り	3			
		総計	206			

図表出典：「地域認識としての景観特性に関する研究—東京都内景観百選を対象にして—」（宮下真紀子，2006）

図2. 景観事業で選定された景観の小分離

景観事業に選定される景観一組み合わせの選定

神社／寺社の祭り	25	寺／墓	6
駅・役所周辺／駅	16	街道筋／神社	5
中小河川沿い／橋	12	大公園／公共施設	5
寺／樹木	12	庭園／公共施設	5
寺／門	10	神社／樹木	5
大河川沿い／橋	8	川から・川越し／大河川沿い／橋	7
寺／その他の文化財	8	街中から／濠／緑地・雑木林／門	4
寺／寺社の祭り	7		

図表出典：「地域認識としての景観特性に関する研究—東京都内景観百選を対象にして—」（宮下真紀子，2006）

図3. 組み合わせの景観

この論文からは、現代においても寺院は都市の名所として認識されることが多いということが明らかとなった。寺院そのものが選定されることについては、歴史的観点や寺院建築への評価などの理由が考えられる。また、境内林や山門、墓などの要素も、寺院と組み合わせられて選定されているという点は、境内空間も、景観要素として名所をつくりだすことに貢献していると思われる。

2.4 まとめ

本章では、まず、現代社会における宗教意識の希薄化の実態が明らかになった。仏教に対する信仰は、「家の宗教」という観念や先祖供養と関連して我々の慣習の中に生きてきたが、近代社会以降の生活構造の変化によってその土台が崩壊した。そして、この問題は宗教意識の希薄化をはじめ、無縁死、地域社会の弱体化、などの様々な社会問題ともつながっていることが明らかになった。

現代では存在感を弱めつつある寺院であるが、社会や都市の中で寺院の歴史を追ってみると、仏教寺院がかつて持っていた影響力は様々な場面でその影響力を発揮してきたことがわかった。宗教が、我々の生活の中に慣習や文化として残っている所以である。特に、江戸時代の寺院の娯楽空間としての繁栄は、金融や観光、都市開発などの分野の発達にも影響を及ぼしている。寺院境内のもうひとつの特徴としては、たとえ庶民の娯楽の場となったとしても、俗界とは異なる性格をもった場所であったということである。市が開かれたり、密談に使われたりした他、駆け込み寺と言われるように法規制が及ばない場所でもあった。しかし、決して閉鎖的な空間ではなかった。こうした歴史的な背景が、現代のお寺に引き継がれていることは、寺院の様々な活動を見ることで確認できた。特に多かったのは、コンサートなどのイベントの場として、境内や本堂を提供するケースである。寺院が自ら主催するものもあり、宗教意識が希薄であるとされる現代人に対してのアプローチの端緒となっている様子が見受けられる。また、光明寺が行っている、境内を地域に積極的に開放していくという試みは、寺院と都市との関係を再構築しようとする意図が興味深いものであった。

宗教としては衰退の傾向にある一方で、寺は、景観としては多くの日本人に親しまれているということも世論調査の結果から明らかになった。これは、宗教意識の変化とは違い、時代や年齢に関係なく、常に全体の8割以上の人を感じていることであった。江戸時代の浮世絵にはじまり、現代の景観事業でも未だに寺院が数多く選定されていることから、寺院の景観構成要素としての価値が確認された。

現代社会では、宗教機能としての寺院はかつてほどの繁栄を見せないが、日本固有の景観として、時代を経て今もなお親しまれているということが明らかになった。